



次 目

佛教の根本と其の應用(其十四).....	本
開目 鈔講話(承前).....	小
經濟界の今日及將來.....	上
國民精神指導としての佛教.....	磯
記 事	
○本部團報 ○立正青年團報 ○福島支部報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其十八).....	本
多	多
日	林 田
生	浦 辰 一
事	卯 郎
記	生

號月十 年四十四第

1910.10.17 3

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

本團署則

ンデ法人組織トナン新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ 第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化ヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法國爲一切衆生切ニ懸望スル所ナリ

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ説明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スペク指頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員 本團ノ事業ヲ襄贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醸出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團 特希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添付セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友 誌一誌ヲ購読スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用

(其十四)

本多日生

科學中毒の弊

何故さういふ大きな時弊が佛教に依つて救ひ得られるかと申しますれば、是は事極めて明瞭であります。今の知識が左様な病弊に罹る根本は、一つは西洋の科學の知識に心醉し過ぎて居ることであります。科學の知識は無論尊敬すべきでありますけれども、その價值を正當に見積らなければならぬ、百聞のものは百聞と值踏をしなければならぬ、百聞のものを一萬圓に買被ればそこに九千九百圓の損が行くのである。科學は非常に尊いものであるけれども、併し人類の文化を造り成す上に於ても、又人間の一人の智能を啓發する上に於ても、科學が全體ではないのである、科學に依つて得るところの知識はどうしても第二段、第三段に位するものとして考へなければならぬと思ひます。第一段に位するものは何であるかといふと、是はどうしても知識として申すならば殆ど何とも名づけ難いやうな、

哲學の極所に上つた深遠なる知識、それが宗教の信仰といふことにもなり、道徳の根本法にも一致するところのものであつて、何とも申しやうのないものである。強いて言へば達人は大觀するといふやうなものであつて、大きな智慧である、整うたる智慧である、こましやくれた、ほぜくつた、機械的の智慧ではないのである、同じ智慧であるけれども大將元帥になるべき智慧である、科學の智慧といふものは中隊長であるとか小隊長であるとかいふやうな智慧が澤山あるのである。だからさういふやうな少尉、中尉といふやうな軍人は澤山あるけれども、大元帥といふものは一國に一人しか無いが如く、その大元帥の命令の下に名部隊が行動を執らなければならぬのに、その大將を失ひ將帥を失つて、部下の者が亂難になつて居るが如き知識の状態が今日の有様である。それは科學の知識に依つてそれを最後のものとしたからして、醫學を習つた者は醫學の知識、法律を學んだ者は法律の知識、經濟を學んだ者は經濟の知識といふことで、一人前に成り得たと考へて居るところに間違ひがあるのである。人間である以上は如何なる學問をしようが如何なる職業に從事して居らうが、その根本をなすところの大きな智慧、それにはどうしても從はなければならないものである。

その事は聖人の方の教で申せばこれは聖智と申して居る、或は睿智とも申して居る、正しいところの立派な根本の智慧を指すのである。佛教の方ではこましやくれた智慧といふものは所謂世智辨相と申して、今日の科學の知識のやうなものはあまり威張ることの出来ぬやうに、先づ符牒を附けて警戒されて

居るところのものである。小智才覺、世智辨相といつて、いくら澤山の物事を知つて居つても、さういふものが一番えらいと思つたら駄目ぢやといふことを始終警戒して居る、それが爲めに般若の妙智と申して、般若波羅蜜多といふ言葉は印度の言葉をその儘翻譯せないといふことを昔は考へた位である。譯すれば『智慧』と譯すべきであるけれども譯さずして、やはり『般若』といふ言葉をその儘遺したのである。さうして佛様の智慧の如きはこれを『正偏智』と申すのである、正しうして偏きところの智慧である、この反對を見れば邪にして偏つたところの智慧即ち邪偏智である。現代の學問に伴ふ餘弊は、智慧が邪まに働いて偏つて行くといふ、邪偏といふことが今日の最も恐しい事になつて行き居るのである。是は何時の時代でも放任して置けば斯うなるので、何時でも却つて學問をする者が間違つた事を言ふのである。學者は大切なもののといふ言葉もあるけれども、始末の悪いものだといふことは、古今東西を通じて相場がきまつて居る、學問した者をみな無條件でえらい者と思ふやうな國民、左様な馬鹿を抱へて置いてはいかぬのである。學問しても油斷ならぬ、彼は寧ろ學問せんければ大した悪い事はせんけれども、彼奴は學問して邪偏智に働く奴であるに依つて一通りならぬ油斷のならぬ奴だ、斯ういふことに國民がみな領解を持たなければならぬ、佛教はその事を宣傳する必要がある。釋迦如來は邪見外道と仰せられて、今日佛教徒は外道とか邪見とか言つたならば先づ非常な悪いものに考へるのである、隣りの婆さんは根性が悪い、あの婆は邪見な奴だ、鬼婆だと言ふ、家主なら家主が因業な事をすれば、彼奴は邪

見な家主だと言ふ。邪見といふことは智慧はあるけれども——見といふ字は知見といつて智慧のことである——その智慧が邪まで働くのを邪見といつて、惡魔外道といふものを兄弟にして居るのである。いくら智慧があつたからといつても、正しく働くのものは決して尊敬すべきものではない、世に毒蛇虎狼よりも恐るべきものは惡知識と申して、智慧は持つて居るけれどもあたまに「惡」といふ字の附く奴が恐しいのである、斯う言うて知識を正邪に別けて非常な警戒を與へたものが佛教である。善知識は全梵行なりと申して、善知識くる大切なものはない、三年學ばんよりは三年草鞋を穿いて善知識を求めた方がよろしいとまで言うてある。何でもかんでも學びさへすれば宜い、何でも知りさへすれば宜いといふやうなことで學問を今日して行き居るのは大きな間違つた事である。

それは、科學の知識といふものは根本に二つの大きな間に合せな考があつて、一つは人間の魂の事がわからない、一つは宇宙の本元がわからぬといふことになり、國家の問題に來れば日本の國體だのその淵源といふやうな事がわからぬ、日本の神様といふこともわからない、天勅といひ神勅といふことも有難いといふ意味がわからない、明治神宮へ參拜しても唯だ立派な宮だ、えらいものだナと思ふ位のことで、明治天皇に對する本當の尊い意味合といふものは出て來ない。この科學の智識だけにして置くといふと、だん／＼大切な人間としての誠心といふものはなくなり、國民道德としては皇室

の尊嚴を思ふところの根本精神が潤れて來る、宇宙に對しては宗教の情操が潤れて掌を合せるといふことがわからなくなる、唯だ天を見てもボカンとして居るやうな人が出來て來る、お父さんのお墓に詣つても横を向いて居るやうな者はかり出來て、少しもそれに感謝し感激するやうな情操が燃えなくなつて來るのである。それは今日でもわかるのである。斯ういふお寺に詣りする方のお墓は、始終されいで、毎日參詣もするし、又華も上げ、水も上げるのであるけれども、青山墓地のやうな立派な墓に行つたならば殆ど人が詣らないのである、華が上つて居るのはそこに居る墓守の婆さんに幾らか金をやつて時々華を立て換へて呉れといふことになつて居るので、自分で行きはしない。さういふ事を形式だけやつて居るけれども、精神的には少しもさういふ情操といふものが無くなつて來る、宗教のさういふ根本の信念といふものは、科學の知識だけに溺れて居つてはドウしても起らないのである。科學と宗教は調和しなければならぬけれども、科學が左様な慢心を持つて居る間は宗教に對して決して一致するものではない、科學は科學の知識の程度を了解して、その心の本體、宇宙の本體といふやうな深遠なる知識はこれを哲學に譲り、宗教の説明に聽從するといふ從順なる態度に復らない限りは、その知識といふものは適當に働かないものである。

ところが日本の今日の教育は殆ど科學を以つて最も尊いものとして、それ以上の所謂達人が大觀するとか、宗教の高遠なる情操といふやうなものを無視して居る文化を作つて居るが故に、百弊これに依つて生ずるものである。これは佛教徒が命に懸けて闘つて、さうしてこの時代の病弊を匡救して、「今にして時弊を革めんば或は前緒を失墜せむことを恐る」と仰せられたる宸襟を安んじ奉るところの使命を擔任する者は佛教徒なり、他の者に託してはこの目的は達し得られないといふ自信の下に活躍するところに佛教徒の力があると私共は信ずるのである。

そこでこの事は簡単に申せばこの時代の要求に對して正知見の啓發、正しい智慧の啓發をするに在るのである。これはお釋迦様の一代經に於てはいつまでも其の事を言うて居られる、徹頭徹尾智慧を無條件で認めた所はない、必ず智慧といふものはその儘にして置けば邪魔に働く、

斷常の見に執して國政をさまるとは、此の理あることなし。
と説かれた、今の科學の如きは斷見常見の外道である、その外道の思想を以て尊しとして文化を造つて行くならば、決して國家は治まるものではない、社會は混亂に陥ると申されたところの、この佛教の教を發揚宣傳しなければならぬのである。

護持論正法

その代りさうして行くには、佛教それ自身がやはり知識に對する正當なる觀念を持たなければならぬ、知識を侮蔑したり、知識を敵視したり、西洋の或る宗教がやるやうに譯の分らぬ獨斷を以て當るといふことはいかない、何處までも知識の正當なる價値を認めて、さうして佛教の態度も前に言ふやうな知識ある者から非難されるが如き愚なる事柄は全廢しなければいかん、堂々と宗教の立場を明にして時代文化の中に進軍して、如何なる學問知識教育の中にも佛教の立場は斯の如き價値ある偉大なるものであるといふことを本當に力説して進むところに、男性的の佛教護持の勇氣があるのである。それでなければ面白くない。サア來い、之れを捨てゝ人は救はれず國は立たんぞ、即ち國は法に依つて昌へるといふのは此の事ぢやといふ所に、本當の力を入れたる運動が起らなければならぬ。唯だ口先で立正安國三法華が盛んになつて太鼓を叩く音が餘計になつたならば日本の國が榮えて行くといふやうな迷信振たやうな事だけ言うて居つたところが、時代人は決して承服をしないものであるし、又それは合理的なものでないと私には思はれるのである。

そこで日蓮聖人はさういふ事に就てどういふか考へかといふと、今私が言ふ通りの事を考へて居られる、遺文續集の中に「智慧亡國書」と題する御書があります、智慧が盛んになると思ふ内に國が亡びてしまふといふことが書いてある、それは唯今まで私が紹介したやうな意味に、智慧に病が附くからして、それを無條件で智慧を考へて居るといふと國は亡びてしまふ、智慧といふものは吟味して進まなければ

ならぬといふ事があるのです。

國と人と教

モウ一つ大切な問題がそこに横つて居ると思ふ、それは一方から申せばやはり道德上の事柄、人格上の事柄になると思ふ、道德上から言へば道德の德育が徹底しない、人格上から言へば人格が頗廢する、學校の教育は思ふ程に德育の目的が達せられない、社會人も亦次第々々に人氣も悪くなるし、人格も頗れて行く、善くはなり居らない、教育界に於ても德育の効果が少いといふ慨歎の聲が揚り、社會に於ても人情風俗の日に非なることが現はれて來る、新聞紙の上にこれが反映して來るといふことであつたならば、之れをこの儘にして置けば、如何にしたところが、唯だ政治經濟を叫んで居つても、この人間そのものが悪くなり、學校の德育の目的が達せられないといふことになれば結局知るべきのみである。鼻を突くにきまつて居る、これは非常な根本問題があるのである、先づその人間が確かりして立派にならなければ、自身も立たず、家も立たず、世も立たず、國も立たないものである。ところが子供は小さい中から學校に行き居つてゐるゝの理窟は覺えて來るけれども、人格といふものは確かりして來ない、德育といふものは效果が上つて來ない、成つて居らぬ奴が社會へ出れば、社會は尙ほそれを誘惑し、潤渦に導くやうに待つて居るといふことになれば、即ちモウ滔々として惡くなつて行くより仕方がない、

さうすれば日本の前途は明瞭な事である、深く考ふるまでもない、これでガヤ／＼やつて居る間に落着くところはドタン、バタン、斯ういふことになるのである。眞に國家の前途を思ふ者は、この德育の徹底、人格の向上といふことに就て有効なる方法を考へ出して、さうしてそれを實現して行かなければならぬと思ふのである。この重大なる任務、使命を帯びるものが佛教である、斯ういふことに考へられる、そこへ佛教の應用を試みて行かなければならぬと思ふ。

至誠心の啓發

これは德育といふことに就て、所謂道德の方から研究して參つても、道德の淵源する所はドウしても宗教性の中へ入つて行つて、人間の誠心を啓かなければならぬ。その誠心を啓く基には、宗教的の意味合、即ち天道を敬ふとか、さういふやうな宗教的の敬虔の態度に入つて初めて人格の中樞といふものが築き上げられるのである。此事はモウ何人も反對の意見を捕む餘地は無いのである。道德上の根本は宇宙法であつて、宇宙法の人間を導く所以は、宇宙に對するところの敬虔の態度である。仰いて天を瞻てはそれに對して自分の心を導かれ、俯して地を視てはその天地に對するところの感情が己れを善化するといふことではない以上は、道德といふものはどうしても完全に發達をせないといふことになつて居るのである。其點をモツト／＼明瞭にして行けば歸するところ宗教の信仰といふことになるのである。道

徳の淵源といふことも宗教の信仰といふことも、往いては一つに歸するのである。それが定まらぬ限りには、人格としては根本の議論が成立たない、故にその餘の事をいろ／＼教へても本當の人間が出來ないことになるのである。

然るに今日の教育の失敗といふものは、功利主義であると言はれて居るが、斯うした方が得であるとか、あゝした方が效が多いとかいふので、萬事を打算的に考へて一種の論をして居るのであつて、人間の誠心を啓いて天地に貫くやうな大精神を喚起して、それから人格を作るといふこの大事な事柄を忘れて來たのである。

そこで今その缺陷を補ふにはどうすれば宜いか。天道に戻つても宜い譯であるけれども、天道といふことが儒教で言うて居るだけでは甚だ漠然たるもので、今日以後の人間を導くことは出來ない、天道とは何ぞやと言はれた時に、『それはお天道様ぢや』……昔の老婆さんならそれで済んだかも知れないけれども、『お天道様は見通しちや』『お天道様ツて何ぢやイナ、お日様カイナ』『さうぢや、お日様かも知れん』……といふやうなことでは、到底今後の人間は承知をしないのである。又昔の儒者が言ふやうに、『天道とは日月を言ふにあらず、蒼々の天を言ふにあらず』と言うて見たところが、お日様やお月様ではない、蒼い空ではないといふことはわかるけれども、それなら天道とはドンナものぢや『姿があるのか』『あるとも言へず無いとも言へず……そこ迄は考へないのぢや、まあそんな事は聽かぬ方が宜い

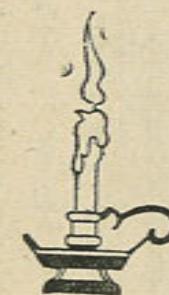
からう』……といふやうなことでは、だん／＼思考を進めて行つたならば天道に對するところの思想が甚だ漠然として居る。『あゝ穆として已ます』といふやうな語は立派なことであるけれども、モソトモソト深い根柢を究めて置いて、さうしてそれが情操に現はれて来てあゝ穆として已ますといふことでなければ、その理智の根を拒絕して置いて唯だ天道を敬へといふ從來の儒教では、今後の人心を指導することとは出來得ないのである。

佛 教 の 應 化

斯く考へて來るとどうしても佛教である、佛教はその宇宙法を説明する上に於ても、理智の満足を與へる上に於ても、十分の哲學的思辨を以つて、さうして宇宙の實相を説き來つて、その上に佛様の實在あらせられて居る事を、理智から眺めて承服をし、情操から眺めても感激をするといふ點に於て、儒教に幾百倍整頓して居るところの立派な教を有つて居るのである。それが佛教の使命であり、佛教の誇である。それに盡す者が坊さんである。唯だ學者や政治家や實業家の力で國家社會が保つのではない、大聖釋迦牟尼の教を發揚宣傳する者が加はつて初めて健全なる社會が出来るのぢやゾといふ、此點に坊さんの使命がある。それが無ければ日蓮聖人はサツバリ有難い事はありはしない、北條と喧嘩したといふだけの事なら、喧嘩の相手が無くなつたらモウそれでおしまひといふことになる。日蓮聖人の他の一

般の國士とか豪傑とか學者と違つて、更に永遠の光を有する所以といふものは、この如來の御教の根本精神よりこれを應用して來たところの、その佛教宣傳の上に於て光といふものがあるのです。北條政府と開つた事だけに日蓮主義があるならば、坊さんは信心をやめてさうして軍人にでも憲兵にでもなつて、甘粕大尉の弟子にでもなつた方が早い譯だけれども、そこが日蓮聖人の本領ではない。さういふ方面も現はれて居るけれども日蓮聖人は法華經弘通の先輩である。

(次續)



開目鈔講話

(承前)

小林一郎

そんなやうな譯であらましで、日本でも、支那で流行つた諸宗が、流行るといふのはそれは皆間違つて居ると言ふのであります。それが間違つて居ると言つても、世間の人人が一向『面を向くべからず』といふのは、相手にして呉れないだらう。ナニモ日本が一人でんな事を言つても、世の中はそんなものではないぞ、世の中は支那の通り諸宗が皆信ぜられて居るのだから、一人でそんな事を言つても相手にならないといふやうに世間の人には思ふだらう。それでも決して負けないでモツト議論をして居ると、どうも生意氣な奴だ、怪からぬ奴だ。世間の人と異

つた意見を立てゝ、自分一人で法華經だナンと言つて居る、彼奴は世の中の平和を紊すものである。世の中の平和を紊すやうな奴はこの儘にして置いてはいかぬといふので、『國主に讒奏して』國の政治の中心であるところの人々に讒言をして、さうして島流しにするとか、甚しい事になれば『命に及ぶべし』命を取るといふことになるだらう。これは容易な事ではないと思ふ。併ながら苟も佛の弟子である以上は、世間の迫害が來ようが、何が來ようが、佛様の御精神に依つてしつかりとやらなければいけない。『我等が慈父』親と仰ぐ佛様が『雙林最後の

御遺言に云く「雙林といふのは沙羅雙樹のことあります。お釋迦様が御入滅になりました時に、沙羅といふ木が二本並んで居るそのまん中で最後をお遂げになりましたから、其處を雙林と申します。即ちお釋迦様の御入滅のことです。その御入滅に先づてお説きになりましたお經が涅槃經であります。即ち涅槃經の中に『法に依つて人に依らざれ』といふことがある。これは初めの言葉を擧げて餘は略したのであります。モウ少し委しく言つて見ますと、斯ういふ風に書いてある。

法に依つて人に依らざれ。義に依つて語に依らざれ。智に依つて識に依らざれ。了義經に依つて不了義經に依らざれ。

斯ういふ風に標準をチャンと立てゝ居られるのであります。これは今日私共が宗教の信仰を決定する上に於ても、非常に大事な條件であります。

容を能く調べて、本當に自分に納得の行くやうな教に依つて行くが宜しい。大丈夫といふ見極めが附いた教に依つて行くが宜しい。その教を弘める人が一時勢力が有つても、地位が有つても、そんなものに依つてはいけない。これは非常に大事な條件であります。

それから『義に依つて語に依らざれ』これも大事であります。義といふのはお經の中に書いてある意味を能く調べて、その意味を能く味つて行かなければいけない。『語に依らざれ』といふのは言葉ばかり詮索して居ても仕様がない。これも尤もです。甚だ惡口を言ふやうですが、今の世の中の佛教をやつて居る人が、義に依らずして語にばかり依つて居る人が多い。言葉の詮索ばかりして居る。『これは斯ういふ意味だ、故事はこれで、誰が何と言つてどの本に斯うある』、斯ういふ風に言葉の詮索ばかりやつて居る。それは何にもならない。言葉を覺えたつて、

先づ第一に『法に依つて人に依らざれ』これは今までも申したのでありますけれども、どの教が一番大事であるかといふ、その教の内容を調べて、一番良い教に歸依しなければいけない。その教を弘める人が、世間に勢力が有るとか、地位があるとか、評判が好いとか、そんなことを本にしてはいけない、斯ういふのであります。これが第一の大事な條件であります。若し世間で評判の好いのが一番宜いのであれば、この間まで騒いで居た『ひとのみち』などといふものは、なか／＼佛教と比べても歸依者も多いし、世間でも繁昌して居つた。だから世間に流行るからそれが良いといふやうなことを考へてはいけない。斯ういふことは第一必要なことであります。世間に流行つて、世間で勢力の有るのが良いといふことになれば、勢力といふものは始終變るのだから結局どれを信じたら宜いか判らぬといふことになります。それで『法に依つて人に依らざれ』、その教の内

の李太白といふ詩人が、當世の學者を批評して、

白頭の章句に死す。

といふ實に痛快なことを言つて居ります。頭の髪がまづ白になるまでこの一章、この一句といふことはかりやつて、それで死んでしまふ、實際白頭の章句に死す人が多い。たゞ第何章に何といふ言葉がある……とやつて居る内に頭が白くなつて死んでしまふ、何を研究したか判らない。それでは何の爲の經典だから少しも意味が無い。だから義に依る、その中の本當の意味を能く詮索して、正しい意味を辨へるやうにしなければならないので、言葉ばかり詮索してもいけないぞ、斯う言はれたのはこれは尤もであります。

それから「智に依つて識に依らざれ」これも大事なことであります。智といふのは物の道理を辨へる力を言ふ、識といふのは世間の經驗であります。經驗的知識です。智は本當の知識です。これが又非常に

けて通つて行く間に、本當の事が解らない。だから「智に依つて識に依らざれ」本當の事をしつかり辨へるといふその力を養はなければならぬ。たゞ世間的のいろいろな小さい事を辨へて、所謂利口になるといふぐらゐのことと、佛の本當の教は解るものではない。斯ういふのであります。これも本當に尊いことであります。

それから「了義經に依つて不了義經に依らざれ」了義經といふのは佛の真心持をスッカリ打開けて説かれたこと、不了義經といふのはまだ打開けられないと、即ち法華經以前の教のこととあります。だから佛様が「これが眞實の教だ」と斯う仰しやつた、その教を學ぶが宜い、お釋迦様が方便だと仰しやつたものを學んではいけない。方便といふのは一時のもので、永久の生命は無い。だから了義經、佛の本當に魂を打込んだ教を學んで、佛が方便だと仰しやつたのは、それは一時はそれで用に立つだらうけれど

不依人等とは、初依、二依、三依、第四依、普賢文殊等の等覺の菩薩が法門を説き給ふとも、經を手に握らざらんをば用ゆべからず。了義經に依て不了義經に依らざれと定めて、經の中にも了義、不了義經を糺明して、信受すべきこそ候ひぬ

それだから「不依人」人に依らざれといふのは「初依、二依、三依、第四依」といふのは、これは世間の人

の大事です。世間の經驗を積みさへすれば人間が利口になると思ふのは、それは大間違ひである。心の煩惱を除かないで、迷ひだらけの心持を以て世の中に立つて經驗を積むならば、經驗を積めば積むほど馬鹿になる。實際大概の人はさうではありませんか。子供の時は完全なものだつたが、だん／＼世の中に出て「斯うやつたら儲かるだらう、斯うやつたら損が行くだらう」。そればかりやつて居るとだん／＼馬鹿になつて、本當の事は少しも解らなくなつてしまふ。人間經驗を積めば利口になると思ふのは非常な間違ひであります。これは露西亞のトルストイも言つて居る、トルストイは「經驗は人間を愚にする」といふことを言つて居ります。これはチト言ひ過ぎたけれども、成程さうです。經驗は人間を愚にする。世の中に揉まれて行く間にだん／＼馬鹿になつてしまふ。本當の事を考へて居たのでは追つかないから、たゞ目前の事ばかり考へて、たゞ無暗にこぢつ

として分けるかといへば、これは場合に依つて違ひますけれども、兎に角世間の人の一應頼りにすべき菩薩のことを言ふのであります。即ち普賢、文殊といふやうな菩薩は、お釋迦様在世の人であります。がそれには四敵するやうな智慧の有る菩薩が、お釋迦様の御入滅後に世の中に出て、さうして世間の人を教へ導く、それを四種に分けて、初依、二依、三依、四依であります。それはお釋迦様當時に於ける普賢、文殊と、殆ど同じやうな覺りを得たと言はれたくらゐな菩薩、さういふやうな偉い人が教をお説きになる場合でも『經を手に握らざんをば用ふべからず』佛様の説かれたお經の本文に従つて、お經に斯うあるからといふのでお經に基いて説くのでなければ、どんな勝れた人が言つて居ることでも、用ひないでも宜しい。何故なら佛の弟子が佛の御趣意と達ふやうな事を説いたのではない。縦ひその人がどんな勝れた人でも、お經に依らないで自分の考がどんなん勝れた人でも、お經に依らないで自分の考を自分のものにするといふことでなければならぬ。

龍樹菩薩の十住毘婆沙論に云、修多羅に依らざるは黒論にして、修多羅に依るは白論なり等云云。だから龍樹菩薩が十住毘婆沙論といふ書物の中に言ふには、「修多羅に依らざるは黒論にして、修多羅に依るは白論なり」この文章の読み方はいろ／＼ありますけれども、斯う讀んだ方がよく意味が取れます。修多羅といふのはあ經のことです。佛の教に依るのがそれが白論、「白」といふのは正しいといふこと、「黒」といふのは正しくないことです。佛様の教者は錄して之を用ひよ」お經と一致するやうなこと

を混ぜて説いて居たならば、これは用ひないで捨てて宜いのだ。これは大事なことであります。それが人に依らざれといふことであります。縦ひその人が世間的に勝て居ようとも、それだけに依つて修行は出来ない。佛様の本當の心持が斯うだから、それで自分は斯う解釋するといふ風に、經文に基いて説いて呉れた時に、初めてこれを信じて宜いのである。ところがその人が智慧があるからとか、その人が世間的に勢力があるからといふやうなことに依つて迷はされて、佛様の御精神に背いて居るやうな言葉は用ひてはならぬ。又『了義經に依つて不了義經に依らざれと定めて』即ち佛様の眞實の教——眞實の教といふものは即ち法華經の中に、正直に方便を捨てるべから、その方便を捨て、説かれたお經に依るべきで、不了義經、即ち方便の教に依つてはならぬとお定めになつて居る。それだからさういふ涅槃經のお言葉がある以上は

に依らないで、自分の勝手な事を説いて居るのが黒論といふものである、即ち正しからざる教である。佛様のお心持に依つて説いたのがそれが白論である。斯ういふやうに龍樹がハツキリ説いて居るのだから、後世の者もさう思はなければいけない。上手に説いてあっても、佛様の教に背くやうな説き方をして居るものは、それは一時は世の中で流行るだらうけれども、永遠の生命は無いから、その所を能く考へなければならぬ。

天台大師云、修多羅と合ふ者は錄して之を用よ。文無く、義無きは、信受すべからず等云云。傳教大師云、佛説に依憑して口傳を信すること莫れ等云云。圓珍、智證大師云、文に依て傳ふ可し等云云。又天台大師もその事を言つて居る、「修多羅と合ふ者は錄して之を用ひよ」お經と一致するやうなこと

を説く者があるならば、「錄して」それを取上げて、成程結構だと思つてこれを用ひるが宜しい。「文無く義無きは信受すべからず」法華經の本文にも何も依りどころがない、或は本文に依らなくても、その意味も叶はないといふものは用ひてはいけない。

これは何故「文無く義無きは」と、文と義と廻つたかといふと、法華經の本文に依らなくても、宜いかもしれない、その意味が一致すれば宜い。例へば天台大師の言ふ一念三千といふのは、お經の中には無い、無くても宜い、法華經の意味に叶つて居るから宜い。必しもお經の言葉通りを使はなくても宜いけれども、併しお經の中の精神に叶はなくてはいけない。それがお經の本文に叶はないとか、或は法華經の本當の意味に叶はないやうなものは、これは用ひてはいけない。斯ういふ事を言つてあるのであります。これは非常に大事なことであります。文字通りといふのではない、それは時代に依つて異つた言葉

で説明しても宜しい、精神に於て一致すれば宜しいのであります。さういふ事を昔の勝れた人は皆言つて居る。

傳教大師もさう言つて居る。「佛說に依憑して口傳を信すること莫れ」佛様の仰しやつたことを頼りにするが宜い、昔からの口から口へ言ひ傳へたものなどは何も頼りになるものではないから、そんなものを信じてはいけないぞ、斯う言つて居られる。世の中では兎角口傳を信する者が多い、「誰が斯う言つて居る、昔から言傳へて居ることだ」と言つて、少しもその佛の説いた事に根據が無くとも、いゝ加減に信するといふ者があるから、世の中には迷信が多くなる。その事を傳教大師がハツキリ言つて居る佛説に依憑して口傳などを信するには及ばない。また圓珍、これは智證大師と讐した人でありますが、この人は寂山に居た人であります。この人も『文に依て傳ふ可し』お經の本文に依つて、それに背

かないやうなことを後世に傳へなければならぬ。斯う言つて居る。

さういふ譯でありまして、何と言つても後世の者が、自分勝手に説いた事を信じて、佛様の仰しやつた事を軽く見るといふやうなことがあつてはならぬ筈である。

上に舉る所の諸師の釋、皆一分經論に依て勝劣を辨ふやうなれども、皆自宗を堅く信受し先師の謬議を糾さざる故に、曲會私情の勝劣也。莊嚴己義の法門也。

然るに前に言ふやうに、華嚴宗とか、真言宗とか、三論宗とか、法相宗とかいふやうなものを世の中に弘めて居る人は、皆自分勝手なことを弘めて居る。その解釋といふものは、一部分それ／＼お經や論に依つて勝劣を辨へるやうに一通りは見えるけれども能く見るとさうではないのであって、自分の宗派を

堅く取り守つて、さうして昔の人の言つた言葉が間違つて居つてもそれを糾さない。糾すには佛の教に依つて糾さなければならぬのだが、その佛の教に基かないで、自分の宗の主張だからこれは飽まで通さなければならぬといふやうなことで、それ／＼自分の宗を弘めることがあり主にして居る。『曲會私情』と言つてこぢつけて、自分の一宗といふことばかり大事にする、その心持に無理に合はせたところの説である、それでどの宗が上である、どの宗が下であるといふことをきめて居る。それはいけない。自分の方の宗の教を莊嚴と言つて、常にそれを飾る爲の方便であるから、それは間違つて居る。

これは能く考へなければならぬことで、佛様の教を學ぶ者は、佛様のお心持を自分の心持としなければならぬ。佛様は大慈大悲であつて、全く御自分を捨てゝ、一切の人間が幸福になるやうにと言つて教を説いて居らつしやる。だから佛の教を學ぶといふ

こともそれでなければいかぬのである。だから人が不幸になつても自分さへ宜ければよいといふのが悪いことは言ふまでもないが、自分を主張するのが激しくなつて、他の宗旨が潰れて自分の宗旨が大きくなるのを望むのもそれも悪い。それが自分の宗旨が榮えて大勢の人を救へるならばそれは宜しい、大勢の人の爲である。しかし大勢の人の爲といふことを忘れてしまつて、たゞ自分の宗旨が盛になることだけ望むならば、それは一種の利己心で、人はどうでも宜い、人を突き飛ばして自分が先に行けば宜いと云ふと同じである。それでいつでも悪口を言ふやうですけれども、今の世の中の佛教がいけないと云ふのはそれです。皆を救はうといふことを忘れて、「俺の宗旨が……」といふことばかり考へて居る。さういふ一つの宗旨などの爲に、お釋迦様は教を説いたのではない。お釋迦様は一切の人を救ふ爲に教を説いたのだから、一切の人が救へるか救へないかと

いふことを主にして信仰をきめなければならぬ。「自分は念佛の家に生れたから、何でも南無阿彌陀佛だ」「自分は法華の家に生れたから何でも南無妙法蓮華經だ」といふのは、それは人を突き飛ばして、自分が先に行かうとするのと、少しも違ひはない。さうではない、吾々が法華經を信するといふのは、ナニも自分の家の宗旨だから信するといふのではない。さうこの法華經に依つて一切の人が救はれるといふ見込を附けてこそ、初めて法華經を信することが出来る。そこを間違へてはいけない、一つの宗とか一つの派とかいふやうなものは捨てたいのです。それが今度末になつて來ると、同じ日蓮聖人を先祖と仰いで居る者の中に、派が十にも分れて、お互ひが「俺の方が……」とやつて居ることは悲しい事であります。そんな宗派を分ける爲に佛の教がある譯ではない。本當にこの正しい教を以て一切の人を救はうといふことでなければならぬ。この教に依つて、總

ての人が救はれ、總ての人が正しい生活に入れるのだから、その教を信じたら宜ろしい。さうしてこの教を世の中に弘めて總ての人を救へれば宜いのだから、小さい事を固執するには及ばない。その事は非常に大事なことであると思ふ。どうも直ぐ対抗する氣になつてしまふ。「何でも彼奴を負かしてやつて……」そんなことばかり考へる。負かすのが主ではいけない。その所をどうも間違へていけない、兎角喧嘩づくになる。そこを日蓮聖人へ能く言つて居ります。

日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。

自分は一つの宗を立てるつもりではない、又どの宗にもくつついて居る譯ではないのだ。佛様の御本意通りに教を世に弘めて、一切の人を救はうと思つて居るので、他に別に考へては居ない。斯う言つて居られる。さうあつてこそ本當に教を世に弘める人

ての人が救はれ、總ての人が正しい生活に入れるのだから、その教を信じたら宜ろしい。さうしてこの教を世の中に弘めて總ての人を救へれば宜いのだから、小さい事を固執するには及ばない。その事は非常に大事なことであると思ふ。どうも直ぐ対抗する氣になつてしまふ。「何でも彼奴を負かしてやつて……」そんなことばかり考へる。負かすのが主ではいけない。その所をどうも間違へていけない、兎角喧嘩づくになる。そこを日蓮聖人へ能く言つて居ります。

佛滅後の續子、方廣、後漢已後の外典は、佛法外の外道の見よりも、三皇五帝の儒書よりも、邪見強盛なり、邪法巧也。華嚴、法相、真言等の人師、天台宗の正義を嫉妬へに、實強の文を會して、權義に順ぜしむること強盛也。

佛様が御入滅になつて間もなく、續子とか方廣とかいふやうな學者が出了。これは小乘の教と大乘の教とどちら／＼にして、こぢつけた説を説いて世の中を惑はした人である、さういふ者もある。又支那でも後漢已後に於ては、『外典』といふのは支那の儒教

のことです。儒教では佛教の教を取入れて、さうして自分の方の儒教を説いて居る。だから印度の佛教の敵であつた「外道」即ち婆羅門の時代よりも、却つて悪いものになつた。無論支那の三皇、五帝といふやうな昔の時代に行はれた儒教よりは「邪見」強盛なり。こちつけばかりやつて居る、「邪法巧也」上手に世の中の人を説き惑はすやうなことをやつて居る。それと同じことで、華嚴、法相、真言といふやうな人達は、天台宗の正しい教が世に弘まることを嫉むところから、天台大師の書を研究して、さうしてそれをこちつけ、それを應用して自分の宗旨の説明をして居る。即ち「實經」眞實の教であるとこの法華經の意味を應用して、さうして權經即ち方便の教を説明するといふやうなことをして居る。それだから、どうも世間の人を惑はすことになる。

の中に勢力が有るからといって、一宗一派を主張するものばかりであるならば、それは相手にしないやうに、斯う決心をきめなければならない。だから日蓮上人が言ふには、自分はまだ地位も勢力も無いつまりない者だけれども、日蓮がつさらないからと言つて悔つてはいけない。日蓮の言ふ事が佛様の御本意に叶よか叶はないか、そこを調べて、果して佛様の御本意に叶ふならば宜しい。又自分の主張が世の中を救ふ力があるかないか、能く調べて、これに依つて世の中が救はれるならば、日蓮は縱ひ地位が無くとも、勢力が無くとも、これを信ずるのが當然だ。それには又如何なる迫害も困苦もこれを顧みないふことを言つて居られるのであります。日蓮聖人のこの態度は實に正々堂々たるものでありまして、斯ういふ心持を以て一つの教を確く信じ、又これを廣く世の中に弘めるといふのでなければならぬ

い。
それで法華經の中に「已今當」といふことがある。これは法華經の法師品の中に、
已に説き今説き當に説かん、而も其の中に於て、
此の法華經最も爲れ難解なり。
とあります。今自分は靈鷲山で法華經を説いて居るが、今此處で説く以前に説いたものも澤山ある。又今靈鷲山で説くものもこの法華經ばかりではない、他の經もある。當に説くべき、これから後に自分の死ぬまでの間にいろ／＼な教を説くだらうけれども、前に説いた教、今説いて居る教、後に説くべき教、總てのものを引括めて考へて、今この法華經の中に説いて居ることが一番深いものである、一番勝れて居るものであるといふことをお釋迦様御自身で言つて居らしやる。これは後の者がこちつけたのではありませんから、これに依るより外仕方がな

然れども道心あらん人、偏黨を捨て自他宗を諍はず、人を蔑む事なけれ。法華經に云はず等云云。又云、已今當の妙、茲に諸經の王と云ふも、已今當說最爲第一と云はす等云云。此經釋に驚て一切經並に人師の疏釋を見るに、狐疑の冰解けぬ。
併ながら「道心あらん人」眞實の佛の道を學びたいといふ熱心のある人は「偏黨を捨てて」一方に偏る心持をやめて、さうして自分の宗旨たの人の宗旨たのと云ふことを諍はないで、佛様の御本意に叶ふやうに世の中の人を本當に救ひたいといふ心持を以て實行しなければいけない。人を蔑みてはいけない。その人が勢力が無いからといって、本當に善い事を説く人ならば、その人に歸依したら宜しい。その人が世

それで唐の妙樂大師がこれを説明して、「縦ひ經有つて諸經の王と云ふも、已今當說最第一」と云はず、他の法華經以外の經の中にも、この經は諸經の王だといふことを言つてあるけれども、併し法華經のやうに、已に説き、今説き、當に説くべき一切の經を信するといふのは當然のことである。

これはちやうど階段を昇つて行くやうなもので、初め一段昇つて二段目に來た時に、前より上だと宣言。三段目に來た時に前より上だと宣言。四段目に來た時も前より上だと宣言。どこ迄行つても前より上だと思つて行く。それは一段目より二段目の方が上に違ひない、三段目より四段目の方が上に違ひない、併し二階まで昇つたのが一番上です。それを「二階へ昇つたのが一番上だ……」「イヤ此處だつて下より上だ……」と言ふのではそれは話にならない、

比べ方が違ふ譯です。そのやうにだん／＼進んで新しい教を説かれる、さうして今説くのは先より上だと斯う仰しやる。その次に又これが一番上だと書いてあるのは、それは當然の話であります。二段目に言つたのと、三段目に言つたのと、二階で言つたのと、その言はれた場合を考へれば、法華經は四十年も説いた揚句に、已に説き、今説き、當に説くべきものの中で一番上だ、二階へ昇つてこれが一番上だと言ふのと同じでありますから、これより上には行かれない。斯ういふのであります。

それでどうもその所は、一切の經を能く見比べて判断しなければならぬので、たゞ一つの經を見ますと、どの經にもこの經はつまらないと言つてあるのは無い。そんな事を言つた日には誰も信じない譯でありますから、どれだつてこれが良いと言ふのは當然であります。「つまらないけれども何とか信じて呉れ……」そんなお經は何處にもない。どの經と

比べて見てもこの法華經が一番勝れて居る。他の經の中に諸經の王と言つてあつても、法華經の中には已今當といふことがあるのだから、これが一番勝れて居るものと言はなければならぬ。

又妙樂大師が言ふには、己に説き今説き、當に説くべきものの中に於て、法華經が最も勝れて居るといふ、その所が解らないで迷つて居る者は、「誇法の罪苦長劫に流る」佛の正しい教に背いて間違つた行ひをすることになつて、その罪の爲にいろ／＼な苦しみを受けて、その苦しみは永い後までも傳はつて行く、一時の心得違ひが大變後悔を貽すことになる。斯う仰しやつて居る。

さうして日蓮上人も、前にはいろ／＼な書物を見たけれども、「此の經釋に驚いて」法華經の中の言葉や、妙樂大師の言葉を見て驚いて、これは容易なことではない、今こゝで間違つたら大變だと思つて、『一切經並に人師』人師といふのは支那に出

たいろ／＼な學者達のことであります、さういふ人の解釋したものを見ると、その時初めて「狐疑の冰解けぬ」今までの間違ひが何處が間違つて居つたといふことがスッカリ解つた。これはスッカリ見比べてゞなければ本當に解らぬといふことを言つて居られるのであります。

それで日蓮上人が三十二歳までの研究時代に於ては、一切の行懸りを捨て、居られるのです。日蓮上人が御出家になつたのは安房の清澄であります。清澄は天台宗の寺であります。後に真言宗に轉宗して今は真言宗でありますけれども、當時は天台宗であつた併し當時の習慣として、大日經を讀んで大日如來を尊ぶといふことをやつて居つた。それでどうもこれでは佛様の御本意に一致しないといふ疑を懷いて、三十二歳までの研究をなさつたのだが、この研究の間に於て、真言宗も天台宗も、何宗もスッカリ捨て、白紙の状態になつて二十年の研究を積ん

で、さうして法華經が一番大事だといふことを見極めたのです。そこが大事です。後世になつて來ると「俺は法華宗だから何とか法華に都合の好事を探し出さう」と思つて本を讀む、「俺は念佛宗だから念佛に都合の好事を探し出さう」と思つて本を讀んで居る。計畫を立て、本を讀んだのでは本當のこととは解るものではない、これはいけない。幾ら本を讀んでも、自分が計畫を立て、讀んだのは駄目であります。私の友達にさういふのがあります。或る金持の家に養子に行きまして、金がウンとあるので、外國の本などを月に十冊も二十冊も取寄せて讀む、吾々は金もないし、又暇もないから、そんなに讀めない。その友達が「こんなに本を讀んだ」と言ふから、「何か新しい説が見つかたか」と聞くと、「大體俺と同じだ」と言ふ。初めから自分の説を變へないつもりで居るから仕様がない、幾ら讀んでも都合の悪い所は讀まない、都合の好い所ばかり讀

む。それくらいなら讀まない方が宜い、「俺と同じだ」と初めから型を捨へて、その型に合せて讀んだのでは、幾ら讀んでも何ものではない。今の各宗の宗學者といふものは、動もするとさうなつて居る。「この型を捨てまい」と思つて讀んで居る。それは讀まないと同じである。日蓮上人はさうではない、天台もなければ真言もなければ何もないスッカリ捨てしまつて、さうして在る通りにお經を読み、論を讀んで、二十年の研究を積んだ結果、法華經が一番だといふことを定められた。それが非常な強みであります。それで自分はいろ／＼疑つて見たけれども、スッカリ根本から研究して見て、その疑が解けて、今はこの法華經を信するといふことになつた。斯う明言して居られるのであります。

實に研究の態度としては斯うあるべきであります。行懸りを捨てるといふことをしなければいけない。吾々でもさうであります、マアあなた方がどの

宗の方か知りませんけれども、「自分はこの宗だから」といふことを捨てなければならない。自分の宗の爲では断じてない、一切の人の爲なのです。又自分が骨折つてこの教を學んで、果して佛に一致することが出来るか、この教を世の中に弘めて一切の人が救へるか、そこに眼を着けて、この目的に叶ふやうにやつたら宜いのであります。自分の宗旨がどうだといふことは捨つべきことであります。若し自分が宗旨が法華でありましても、法華が世の中を亡ぼすものならば捨てた方が宜い。さういふことは間違ひのないやうにしたいと思ふのであります。

現に私の家の宗旨と言へば時宗です、藤澤の遊行寺の方です。チヤンと先祖の墓も時宗の寺にあります。が、私はどこまでも時宗で南無阿彌陀佛をやる氣にはならない。併しこれは決して先祖に對して不孝でも何でもない、自分が正しいと考へた教を信じて、その教に依つて先祖を拜むが宜いのだ、斯う自分で

は思つて居るのであります。どうしても行懸りを捨てなければならないから、吾々が法華經を信するといふことは、何宗何派を問はぬのであつて、必ずこの教が末法の世を救ふ教であり、又この教が一切の人を救ふものであると思ひ、又自分の心の中を調べて見て自分の心の中を成程有り體に説いて聽かして下さるものだと思ふから、この教を信ずるのであつて、この文章は、その私を捨て、又行懸りを捨てなければならぬといふことを能く教へて下さつて居ると思ひます。

(第三十講了)



經濟界の今日及び將來

此は夏期講習會に於ける上田理事長のお話の要旨であります。

上　田　辰　卯

緒　　言

近頃統制經濟と言ふことを頻りと申します。確に昔の自由經濟といふものが無くなつて、今日では自由の相を全く無くしたところの束縛された經濟の傾向になつて居ります。それは一體どういふ譯でさうなつたのぢらうか、當然さういふ風になるべき苦であつたのであらうか、それとも何人かの要求に依つてさうなつたのぢらうか、又その統制經濟なるものは一時的の現れであつて、事變の終了とか或は國際收支の狀態の變化することに依つて昔の通りになるものぢらうかどうかだらうか、モウ永久に昔のやうな自由な相は來ないだらうか。斯ういふことを考へて見、最後に、若しこれが一時的の現象でなくして、少くとも半永久的のもので、昔のやうな相には復らないのだといふことになると、それは一體佛教から觀て望ましい事であらうかどうか、若し望ましい事であるとすれば、佛教徒はこれに拍車を掛けて進むべきであらうし、若し又望むべからざるものであるとするならば、或は何等かの方法で阻止する途を講じなければならぬので

はないか。斯ういふ事に就て申上げて見たいと思ひます。

自由主義經濟と統制主義經濟の意義

自由經濟といふのは、申すまでもなく個人が自由に思ふ儘に振舞へる、經濟機構であります。儲かりさうな仕事はする、損の行く事はしない、誰にも束縛を受けない、たゞその標準となるものは金が儲かるか儲からないかといふだけの事であります。さういふ自由な經濟が、さういふ事であつてはならないのだ、斯ういふ事になつたのは抑々何の爲だらうか。私はこれはこの度の日支事變の爲ではないと思ひます。銘々の意思で全くの無束縛に、自由に活動出来るといふ經濟組織は、最早や最高の發達を遂げてしまつて、これ以上の發達の餘地が無くなつた、従つて何等かの機會に——とは機會がなくても——變化をして行かなければならなかつたのだと思ひます。ちやうど小學校を尋常六年まで行つて、義務教育としては上り詰めた。これで學校をやめるか、更に中學校に行くか、何れにしても小學校の教育は其處で結末を附けなければならない。斯ういふ状態になつたのであらうと思ふのであります。偶々事變がこれを促進するとか或は強化させたといふ點はありますけれども、この事變が無くとも斯ういふ風な變化は來たのではないだらうか。これはちやうど社會主義の人達が、資本主義の行詰りだと言つて、可なり昔から攻撃したものであります。それではそれと同じのか、お前は社會主義か、斯ういふ人があるかも知れませぬが、私の見る所では、社會主義が資本主義行詰りと言つたのは、實は行詰りではなかつた時代です。社會主義の一番盛んであつた時は何時でありますか、先づ日本に於ては大正から昭和に掛けた時であつたらうと思ひます。その時代は一體日本はどうだつたらうか、資本主義は全く行詰つて居つたらうかどうか、私は行詰つて居らなかつたと思ひます。行詰りどころか、その時代は日本が非常な力を以て發達

して居た所であります。即ち資本主義が日本の國力の發展に非常に役立つた時代であつたやうに思ひます。隨てその當時の社會主義は、露西亞とか或はその他の國では相當現實と一致したかも知れないのであります、少くとも日本に於ては相容るべからざるものではなかつたらうかと考へるのであります。

それならお前はどういふ所を提へて、その當時には資本主義が役立つて居つたと言ふかと反問されるかも知れませぬが、御承知の通り日本に於て明治以後先づ一番に發達したもののは紡績事業であります。日本は女も男も大勢居りますが、殊に女の手が多い。隨て質銀が非常に安い、而も手先は非常に器用である、斯ういふいろいろな好條件が具はつて居りますて、而も地理的の關係で、亞米利加から棉を買つて来て日本でこれを紡いで、さうしてこれを支那大陸に賣る、ちょうど日本がまん中にありますて、地理的にも非常に都合が好かつた。その當時は日本人も洋服などはあまり着て居なかつたので、木綿が非常に消費されたが、その日本内地の需要を充たして、更にモウ一步進んで支那大陸に輸出するにも非常に好い條件が具つて居つた。即ち亞米利加或は英吉利で紡績事業を起すより、日本で起した方が遙に金が儲かつた。安い人間をこき使つて、出來たものは高く賣れた。又割合小器用なものが出來たといふことで、紡績事業が非常に發達したのであります。即ち算盤勘定で非常に有利だといふことが、日本の紡績業の非常に發達した原因だらうと思ふのであります。それが明治から昭和に掛けて最高度に發達したのであります。これは單に紡績ばかりでなく生糸もさうであります。日本は世界で一番養蚕の盛な國で、自分でも着れば他國にも賣つた。隨て紡織物が盛んになつて參りまして、この所謂纖維工業の發達といふことが日本の大きな發展に重要な役割となつた譯であります。

さういふ日本の特殊な事情で、算盤を彈いて非常に儲かる仕事が日本經濟を發達させたといふその時代が、明治大正でありますけれども、それでは他のものは何も發達しないで、纖維工業だけが發達したならば日本の國家の發展といふものには差支へないものだらうか、恐らく大正時代までには私は差支なかつたのではないかと思ひます。別に世の中にさう大して世界中の大戰爭といふ不安もなかつた、モウ歐洲大戰爭で皆疲れてしまひましたから、さういふ不安がない。金が儲かりさへすれば宜いといふ時代であつたのであります。その平和な時代がだん／＼と進んで来て、どうやら戰爭の不安といふものが出來て來た。日本もこの小さな國でさう人間ばかり產み擴げて殖やしてしまつたのでは、何處か新に國を見付けなければどうしても日本人は生きて行かない。それにマア手近な所で滿洲邊りはどうしても日本が貢はなければならぬ、尤も他の國でありますから、たゞ貢ふと言つて奪る譯には行かないから、そこには場合に依れば一戰争起るかも知れない。そこに必然的に日本民族の發展といふとの爲に、一つの戰爭といふ問題が想像されて來たのであります。それは戰爭が始つたら一體どうか、戰爭が始まつたら紡績機械などの紡織物の機械ばかり幾ら並べも決して勝てはしない。やはり大砲の弾も要れば軍艦も入用だし、飛行機も必要だ。ところがさういふ工業が日本に發達して居つたらうか。さういふ事を自然に放任して置いて發達するだらうか、どうだらうかといふことを考へて見ますと、その當時の狀態に在つては絶対に發達しないと言ふより外ないのであります。

何故發達しないか。先づ重工業と一口に言つて居りますが、その中では製鐵事業が大きな仕事であります、これは戰爭遂行に一番最初に必要なものであります。ところがその鐵は日本に十分あるかと言へば非常に少いのであります。日本で含有量の少い鐵石を掘りちらかして鐵を捲へるよりも、印度や亞米利加から買つて來ると非常に安い良い鐵がどうさりある、隨て錢勘定して見るとそんなものを日本でやつても合はない。即ち今の自由經濟といふ算盤だけ彈いて、

儲けさへすれば宜いといふことであつては、日本の國防上に必要な事業といふものは永久に發達しないといふ結論になる譯であります。そこでさういふ必要な事業を發達させる爲にはどうしたら宜いだらうか、そこにはどうしても損得に拘らず發達させようといふ一つの命令を誰かゞ下さなければならぬ。これが抑々自由資本主義の行詰りになつた原因ではあるまいか、少くとも日本が伸びようとする爲には自由資本主義であつてはならないのだといふ現實的の行詰りから、理窟でも何でもない、本當にさうするより外に方法が付かなくなつたといふことが、昭和の何年かの状態であつたと思ひます。

金解禁と自由主義の排撃

モウ一つこの自由主義の行詰つた原因に金の解禁といふことがあつたのではないだらうか、大分古い事になりましたのであれ程大騒ぎをやつた金解禁もモウ殆んど忘れられてしまつた譯であります。あの金解禁と再禁止といふものは今から考へると實に大きな事件でありまして、只五四の紙幣を日本銀行に持つて行つても五圓の金貨に取換へなかつた、或は外國へ金を持出さうとしても爲替が安かつたといふだけの事でありますけれども、實際は日本の經濟を根本から覆すやうな大きな問題であつたのであります。どうしてさういふ事になつたか、故人になられた濱口さん、井上さんはそれが爲に尊い犠牲になられた譯であります。その金解禁の狀態になる以前には、どうしても經濟の根本を決めるには紙幣と金が断え引換へられなければいけないのだ。總ての尺度が金である以上は、その金といふものは金とはつきり結付いて居なければいけない。吾々の間でもさうであります。『あの男は金持だといふことだが、一體幾らぐらゐ持つて居るだらう』『さうだネ、まあさつと十萬圓ぐらゐあるだらう』斯ふ言ふのですが、それではその十萬圓を金庫の内に

積んであるかといふと、さうではありませぬ。十萬圓の價値のある土地を持つて居るとか、家屋を持つて居るとか、商品を持つて居るとかいふのであります。さういふ處てのものを金に勘定する。人間の價値まで金に勘定される。卒業するとお前は幾ら取るといふやうなことで月給を勘定する、利口馬鹿といふやうなことも金で勘定される。代議士の選舉までも金で勘定する。斯ういふ風で、總てのものが皆金で換算される。それでは金の尺度、金の基礎は何かと言へば金一匁五圓だといふことで價値があるのです。その金が世界中一番變動がないといふやうなことや、その他いろいろの事から、どうしても紙幣といふものはしつかりとして置かなければならない、これが先づ濱口、井上兩大臣の合作であります。可なりな犠牲を拂つて金解禁が行はれた譯であります。

ところが運が悪い事には滿洲事變が始まつたり、或は色々な事がありまして、金が非常に澤山出てしまつて、日本銀行の金庫の中には金が無くなつてしまつたといふので、已むを得ず内閣は瓦壊して大蔵内閣が出來ると又それを止めた。さうすると五四の紙幣を持つて行つても五四の金貨と取換へて呉れない、それが四國になり、だん／＼安くなつてしまふ。斯ういふ工合で金の基礎といふものが、動搖し始めたのであります。これは非常に大きな事柄であります。今迄は『君は月給を幾ら貰つて居るか』『百圓だ』といふと、如何にも百圓の價値があり、百圓の生活が出來たやうに思ふが、それは金に結付いての百圓であります。金を離れて見るとそれはたゞの紙でありまして、政府が印刷機械に掛けて刷つた紙に過ぎないのであります。その紙を何枚持つて居つてもそれが金の價値を持つて居る譯ではない、それをだん／＼放任して置けば、遂には紙幣を幾ら持つて行つても希望するものは買へないといふ状態になる譯であります。今皆さんは懷中に幾ら持つて居らしやるか、失禮ですが恐らく千圓は始終持つてお居でにならんでせう。大抵

五十四か百圓でありませうが、五十圓や百圓ではパン一片買へないといふ時代が直ぐ出来ることであります。ところが幸か不幸か、日本人は割合に紙幣を見ると、少しもそれに就いて不安を感じませぬで、永久に五四は五圓、十四は十四といふやうに信じてゐる。經濟觀念が發達して居ないためでもあります。これが蘇羅巴邊りの國であつたら忽ち紙幣が下落する、即ち物價が上り、紙幣が非常に下落して、收拾の附かないやうになるのであります。

かやうに考へて來ると近代日本の國家が存立する上に於て無くてならない事業といふものは、自由主義經濟のまゝに放任して置いては具合が悪い、發展して行かないといふことが想像されるのであります。繰返へして云へば自由主義の型で行くのでは金を儲けるといふことが總ての經濟活動の源泉になる。然らば金儲けはどうかと言へば、金輸出再禁止に依つて破壊されて來た。即ち儲けることが既に國家的にならないし、私利私慾の爲の經濟活動は決して公益的にならない。縱しそれをやつて見たところで私利私慾の根源となる紙幣の價値が決まらないといふことで、資本主義の根本がない。縱しそれをやつて見たところで私利私慾の根源となる紙幣の價値が決まらないといふことで、資本主義の根本がない。紙幣から崩されて來た譯であります。金は物の尺度であります。着物を縫ふにしても、例へば羽織の丈たけが二尺とか三尺とか言つても、尺度が伸びたり縮んだりして居つては度はりやうがない。あれは現あら金がある、これは幾いくら金がある、これは二十錢、あれは五十錢と言ふことが出来るが、と言つて見たところで、これが正しいお金で以て度はるのであれば、これは二十錢、あれは五十錢と言ふことが出来るが、その二十錢、五十錢が甚だ不安定だといふことになつて、金で以て物事を換算することが現實に不可能となつて來たのだらうと思ひます。

その間に一體これを取扱つて居るところの政府はどういふ事をして居つたらうか。これが又甚だ面白くない次第であります。それ程の國家經濟の、或は國民經濟の原則が動いて來たに拘らず、政府は今から考へると極めて鶴架つるかであつ

た譯です。その時は高橋是清さんが代つて大藏大臣になり、さうして金の輸出を禁止した。紙幣を持つて行つても金貨に取換へて呉れない、隨て物の價値が上るので紙幣は止め度もなく出て来る。さうすると公債をどつさり出さなければならぬ。赤字公債といふものはこの時から始まつた。その赤字公債が十億になり、十五億になり、二十億になり、年年殖えて行つたにも拘らず高橋さんは赤字公債漸減方針といふことを言つて居りました。これは皆様も御記憶であります。が、赤字公債も年々減らして行くといふ。これは一方から見ると赤字公債がだん／＼減つて行くやうに思はれる、そこは人間の頭脳の少しおかしい所であります。今年は赤字公債を二億減らした、これからだん／＼減らして行く方針だ、斯う言ふと、本當に減つて行くやうにちよつと錯覚をするのであります。實際はさうではなくして、昨年の赤字公債十億とすれば、今年は十五億にならなければならぬのであるが、それを十三億に止めたから二億減らしたのだ、斯ういふことを言つて居る。實にこれはごまかしであると言つても宜いではないか。即ち赤字公債漸減方針といふのは、さういふごまかしの方針であつたのであります。隨て一國の大藏大臣、或は總理大臣が常にさういふごまかしの仕事をして居るのだ、これでは如何に國民が眞面目になつたところで日本が立行かなくなるに相違ない、即ち政黨の内閣であつては、日本は必ずや何時か減びなければならない。斯ういふ事で非常に氣の早い血氣の青年將校が立つてあの五・一五事件續いて一二・二六事件といふやうな不祥事件を起した譯であります。あの當時の議會の速記録などを御覽になつた方は御解りであります。が、その當時の陸軍大臣などの演説の中に於ても、五・一五事件も一二・二六事件も、その根本の原因は自由主義の排撃に在るのだといふことをはつきり言はれて居ります。即ち今申しました經濟的に金きんさへ儲かれば宜いのだといふ譯で、蟻の甘きを慕ふが如くやつて居て、それで國家は宜いのだといつた自由主義がいけないのだ、これを一遍

壊してしまはなければいけないのだ。或は金の尺度、金で以て總てのものを度るといふことがいけないのだ、物を以て總てのものも度つて行かなければいけないのだ、永い間の金を以て換算した經濟觀念といふものは根本的に覆へしてしまはう、斯ういふ風な事が先づ五・一五事件或は一二二六事件ではなかつたかと思ふのであります。

自由主義經濟の一例

これは屢々お話することありますから皆様御聽きになつたと思ひますが、實際あの當時あの儘に放任して居つたらばどうだらうか、恐らく日本で出来るものは極めて僅かなものだつたと思ひます。私は乾電池の仕事をして居るので今から二年程前に一體今自由主義經濟時代に外國品をどの位使つて居つたらうか、その割合はどうだらうかといふことを調べて見たところが、外國品を隨分使つて居ります。そこで私は外國のものを使ふのは廢さうではないか——それはナニモ日支事變が起ると思つた譯ではないが、エチオビヤと伊太利の戰争があつて地中海を封鎖されさうである。主に私共の使つて居るものは英國品や獨逸品で、地中海を通つて來るので、あれを抑留されてしまふのが非常に恐しい爲に、日本品を使へと言つたところが、どうしても日本品は使へませぬと言ふ。例へば鹽化アンモニウムでも、今では日本品を使つて居りますが、あの當時は獨逸品を使つて居りましたが、日本品よりも安くて品が良い。あれは私の方では電解に使ひますが、普通の金鍍金、銀鍍金にも使ひます、皆さんも御經驗があるでせうが、日本品を使つた鍍金は直ぐ剥げてしまふ。ところが獨逸品や英國品は全く鍍金と思へないやうなピカ〳〵した光をして、いつ迄も光つて居ります。私の持つて居るこの裏口の口金も、二年ぐらゐ持つて居りますけれども、よく人からお前は金の裏口を持つて居ると言はれるほど、絶対に剥げませぬ。ところが日本ものは一月も使ふと中の白い金が出て来て、錆びて腐つてしまひ、直ぐ

使へなくなる。それ程良い向ふのものが三割も四割も安い、而も地中海を通り、印度洋を通つて運賃を掛けて日本へ持つて來て日本の方が高い、高くて悪いといふのだから、金儲けを中心として居る所では發達しつこない。又私はよく亞鉛板の話を致しますが、亞鉛板で非常に不愉快といふか、殘念に堪へなかつたのは、亞鉛板は電極に使ひますが、これも日本には、随分必要なものであるに拘らず、亞鉛を造つて居る所は日本中に一箇所も今まで無かつた、たゞ三井だけが犠牲的に三池で持つて居つた。それは三井の三池の電氣化學の方で、別に亞鉛板で儲けたくないけれども、外國で出来るのに、いつまでも日本で出来なくては困ることがありはしないかといふので、政府で強制的に持へさせて居つたが少しも儲からない。儲からない苦です、私共も九州へ行つて見て、こんなに良く出來たと言ふから、これなら使つても宜さうだと思つて、試しに一樽買つて使つて見ると、逆もそれはお話にならない粗末なものです。見掛けは立派に出来て居るやうであります、それが蛇が蛙を呑んだやうに彌れたり、凹んだりして、何處かローラーを通してありますけれども、うまく行かない。だからそれを使つて丸めて鍛にする。さうして内から電氣が起るのですが、一番抵抗力の少ない所が破壊されて來ますから、薄い所が直ぐやられてしまふ。他は幾ら厚くても、薄い所が一箇所あると駄目になつてしまふ。よくお話を致しますが乾電池の譯にする爲に亞鉛板を四角に折りますが、日本のものは、折ると其處に割目が出來て、直ぐすつと縫製が行つてしまふ。ところが獨逸や英國のものはさうではない、何十遍折り曲げても、クジヤ

タシオにしても決して嫌が寄りませぬ、叩かうがどうしようが絶対に嫌が寄らない。それが爲に日本でさういふ事業を起さうといふ人が無かつた、縱し持へても使ひ手はありませぬから、ナニモ損してまでそんな事をやる人はありませぬ。少なくとも亞鉛板の仕事だけで言つても、これは絶対に日本ではあゝいふ仕事は起らなかつた。銅でもさうであります、この間も産金會社の社長が亞米利加視察から歸つて來ての話に、銅製錬所の一日の製錬が三千五百噸からあるといふ、而もそれは亞米利加中の總計ではない、僅かに一箇所の製錬所の設備がさうであるといふことです。日本ではあつちこつちやつて見るが、到底それは及ばない。我國は今亞米利加の通商條約廢棄といふやうな問題に遭遇して居りますが將來この銅の供給に就ては骨が折れるのであるまいか、戰争に無くてはならぬ、大砲などは大體鐵と銅とで出来て居るやうな譯でありますから、さういふものは一體どういふやうにして始末をするのか知らんと、私共物質の方から考へて非常に不安を感じて居るのであります。

さういふ状態が兩方面から襲うて來た爲に、日本ではどうしても、唯全が構かるからといふやうな一つの利慾を活動の標準とする經濟界をこの儘放任して置いてはならないのだ、どうしても國が入用なものを、損得に關係なしに持へさせ、僅かつても不用なものは持へさせない、儘からなくとも入用なものは命令して持へさせる。それが日本の發展の上に是非とも必要だ、斯ういふことになつて來たのが、自由主義經濟の破壊の端緒であつたのではなからうか。隨て純經濟方面から見ますと、今の過去の自由主義の經濟といふものは、日本に關する限りは、誰が維持しようと思つても、誰が存續しようと思つても、これは訂正さるべき運命に在つたのだ。斯ういふ風に考へる者であります。

滿支人と日本人の比較

大體私は、日本が今の戰争の爲も一つはありませうけれども、海外に發展しようといふ爲には、自分の算盤勘定、個人個人の利慾の勘定から經濟活動をやつて居つたのでは、きつと支那人に負けてしまふと思つて居ります。私もこの頃滿洲の關係の方の仕事がありますので、チョイ／＼参ります。今年の三月にも参り、又五月から六月に掛けても参りましたし、九月にも参る筈であります。餘程日本人がしつかりしなければ、戰争には勝つても經濟上に於て支那人に負けると考へるのであります。私は昨年、滿洲に取引所を作るといふ話が政府にあつて、それに就いてどういふ風に作つたら宜いか、その相談に行きましたが、その時に先づ安東、大連、奉天、新京、哈爾賓、斯ういふ所を一通り見てからでなければ回答が出來ませぬから、一通り見て廻つたのですが、情けないことは、大連も、新京も、哈爾賓も、日本人が向ふへ行つて取引所を持へたにも拘らず、今營業して居る者は殆ど全部が滿人であります。哈爾賓にたつた一人日本人が居る限りで、あとは皆滿人です。奉天はどうか、奉天はさうでもないが、それは何故かといふと、奉天は淋れ切つてしまつて商賣がないから滿人が入つて居ない。隨て商賣の出來て居る所は、滿人の手を経なければ商賣はやれないことになる。それを見て、どうも自分が内地で考へて行つた事が全然役に立たない。『どうもこれはチツと困難だ』それでは一體あなたは何しに來たのか』『併しこれではどうも案が立たぬ』『そんな事はないだらう』と言ふ。それから私は今の事實を言つたところが『いや、さう言はれるとその通りだ、併し今度は君大丈夫だ、今度は半數以上は絶対に滿人を入れないことにする、假に三十人とすると、十四人しか満人を入れない、過半數は必ず日本人が押へて居るのだから安心だらう』『それは駄目です、その日本人の十六人が、商賣が成立たなかつたら廢業するでせう、十六人全部がやめたら十四人の満人全部になつてしまふ。日本人一人やめたら満人一

人をやめさすといふなら宜いけれども、さういふ事は出来ないでせう』といふので、未だに新京へ作らうといふ中央取引所は設立出来ないで居るのであります。今年になつてから餘りみつともないといふので、奉天の今商賣をやつてない古家を少し改造して、其處で何とかお茶を濁せる工夫はあるまいかといふのでやつて居りますけれども、誰もそんな所に寄り附く者はない。又一昨年臺灣の總督府でやはり取引所を括へるといふことがあつた、これは今年の議會に出ましたけれども、臺灣米が專賣になるので、米の取引所を整理しなければならぬ、その爲にそれを株式の方に變更させよう。それに就てこれをどうしたら宜からうといふので、私參りましたが、これもやはり同じことであります。臺灣人もともと支那人でありますから商賣がうまい。正米の取引所は社長は日本人がやつて居つたけれども、あとは皆臺灣人です、尤も日本人も少しは居るけれども、それは三井物産とかいふやうな大きな所が五人ぐらゐ入つて居るだけで、あとは皆臺灣人であります。さうすると今度臺灣に株式取引所を作つたところで、臺灣人の取引所になつてしまふ。それではいけないではないか、それはどうも困るといふので、やはり又例の過半數……これもやはり駄目です。これは單に取引所だけでなく、臺北へ行つた方は御承知でありますうが、銀座通り、日本橋通りといふやうな大通りは全部本島人であります。ところが最初臺北を括へた時には、良い所は皆日本人にやつて、さうして本島人は裏店みたやうな所をやつた。ところが本島人は第一に體が丈夫です、私などよりすつと大きい、支那人もさうですが、支那人よりもつと堂々として居る。さうしてもと／＼支那人でありますから、日本人が一言喋べる間に十言ぐらゐ喋べる、算盤は上手だし、吝嗇で無駄な事をしない。それであるからだん／＼金が残る。日本人は表通りに出て居るけれども、まやかし物ばかり賣つて居るので、二度と日本人の店には買ひに來ない、困つてだん／＼表通りから裏通りに引越し、表通りは皆本島人のものに

なつてしまつた。本島人は表通りに出て一生懸命勉強するから、だん／＼金が出来る。さうして金が出来るとどうするかといふと、日本の公債など買ひはしない、日本の銀行は當てにならぬといふので土地を買ふ、それでなければモウ一つ海を越えて福建省邊りに持つて行つて向ふの支那の銀行へ金を預ける、日本の銀行は危ないといふので信用しない。それもしない者は瓶の内に入れて床下にでも埋めて置くといふ有様であります。さういふ事は一體どういふ結果になるものだらうか、臺灣は日清戰爭の結果取つたのでありますが、その臺灣の土地を日本が取つても、本島人が金を儲けて、それで皆買取つたら、結局本島人の臺灣になつてしまふ。日本人はだん／＼と失敗して内地へ追返されて来て、結局本島人の所有に歸した日には一體どうなるものだらう。斯ういふ事に想ひ到つて總督府でも非常に驚いた譯であります。モウ一つ困る事は海を越えて福建省の銀行に金を預けてある、さうするとマア假に今度のやうに日支事變でも始まつたらどうでせう、本島人としては、日本が勝てば支那の銀行は潰れるから自分の預金はおじやんになる、だから成べくならば日本が勝つて呉れないやうに、支那が少くとも負けないやうにといふことだけは希望するに違ひない、それは重大なことです。ところがたゞ重大だ／＼と言つて居るだけであつて、重大だといふことを幾ら口で言つても駄目です。商人は幾ら重大だと言つても損の行く物を買ふ氣遣ひはない、悪い物を高く賣つて居る所へは絶対に買ひに來つこない、ですから幾ら總督府が重大だと言つても駄目です。私がちやうど臺灣に行つて居りました時に今度の事變が始まつたが、その時の總督府の緊張は非常なものであります。それは何故かと言へば、やはり經濟的の壓迫を感じた爲に、臺灣本島の治安の維持如何といふことに考へ及んだ譯だと思ひます。今度の事變でも一番先に飛行機が臺灣へ行つたといふ話を聞きました。それは渡洋爆撃の目的もあつたかも知れませぬが、臺灣の治安維持といふ問題もその一つであ

つたといふことがあります。

さういふ工合に考へて來ますと、一人對一人で喧嘩をしては速も敵ひつこない、支那人は隨分大きいから、取組んだら速も敵ひつこない、支那人は非常な力持です。日本人は氣は強いけれども、一人々々で取組んだら氣ばかりではいけない。たゞ日本人が勝目があるといふのは、一つの國家といふものが一團になつて進んで行くからで、それだけが勝目です。その當時私も歸つてからちよつと所感を申述べたと思ひますが、日本人は國家を離れたら駄目です。日本人の個人個人といふものは、世界中で勝目から言つたら生存する力が無いものではないか、極端かも知れませぬが……。それが證據には日本人ぐらゐ體格の悪いものはありませぬ、男でも女でもさうです。支那人は勿論ですが、今の朝鮮人などと比べてもすつと内地人の體格が悪い。白人は無論のこと、印度へ行つても何處へ行つても日本人は比べ物になりませぬ。一見非常に精悍のやうに見えるけれども、耐久力は恐らくこんな小さな體では無いのではあるまいか。それですから結局一人々々では駄目です、國家が一團となつて日本の存在があり、日本人の存在があるのだ。私は斯う考へて居るのであります。

個人經濟より團體經濟への推移

さういふ事は前に述べた經濟關係とどういふ關聯を有つかといふと、既に日本人が大陸發展とか南方發展といふやうなことを言つても、所詮それは個人同士の戰では駄目だといふことになれば、國家といふものののみが存在することになる。隨て一切の經濟の根幹は、個人でなくして國家でなくてはならない。それは好むと好まさると拘らず、さうしなければ日本國は立つて行けないし、日本人も生きられない、私は斯ういふ風に考へます。隨て自由主義經濟の變革とい

ふことは、日本の存立上實に已むを得ざるところの變革であるのだ。隨てその變革は決して一時的のものではない。それは今の日本人よりも立派な、六尺も七尺もあるやうな大きな體になつて、腕力も今の三人前以上もあるやうになつた。それはどうだか知れませぬが、今のやうに物を買つても『釣銭は要らないよ』と言つて、釣銭を取ることを卑しいと思つたり、金の勘定をするのを汚ないといふやうな、さういふだらしのない、經濟觀念に缺けた人間が、これから困難な經濟を擔つて行くといふことは絶対に不可能だと私は思ふ。私はよく友達に『お前ぐらゐ錢勘定ばかりして居る者はない、一體金を持つて死ぬ積りか』と言はれます、私も死ぬ時持つて行けるものでないことは知つて居りますけれども、併しマア私のやうな豊かでない家に生れたものが金勘定しなかつた日には、永久にどうすることも出來ないのであります。實際今は何でも金で勘定しようといふ世の中に、全が一文もなくしては何一つ自由になりはしませぬ。私の今仕事も、今日日本にはこれはどうしても無くてはならない事だと思つて、生意氣な事を言つてやつて居るのであります。が、これも私に幾分か餘裕があるからでありまして、私が無一文でただ幾ら大きな聲を出しても、誰も狂人だと思つて相手にしませぬ、やはり自分の所に金がなければ何事も出來ない。今日日本では國家といふものが中心でありますけれども一步海外に出れば依然としてやはり金を勘定するのであります。お互同士なら、二つ仲好くして財布を一緒にしようと言つても済むかも知れませぬが、併し支那へ行つて支那人に、どうだ財布と一緒にしようと言つても誰もするものではない。ですからやはり國家の經濟觀念と個人の經濟觀念といふものをしつかり持つて居つて、その上にその中心を國家に置くといふ方法に進んで行くべきものではないかと思ひます。

然らば佛教では一體經濟をどう觀るか、金の勘定ばかりしてはいかぬといふことをお釋迦様が教へて居られるだらうか、どうだらうか、自己の利益だけ圖つて世の中に經濟活動をして宜いといふことを言はれて居るだらうか。私はいろいろのお經を讀いて見ると、中には個人の慾望は決して否定しない、個人の利慾といふものは一つの菩提の善い行ひをする活動力の源になるものだといふやうなことが書いてあるものはあるけれども、要するにそれは善い仕事を爲すところの活動力の源だといふだけでありまして、それは一つの手段であります。決して個人の利慾の爲に働くといふことは佛教ではお釋迦様は少なくとも仰しやつて居られない。佛教では菩薩行として布施といふことを一番先に書いてあります。が、さうすると世の中には、この布施といふことは、自分が金を持つて居るから布施をするのだ、だから金を持つて居ることを肯定して居るのだ、やはり金を儲ける爲にうんと經濟活動をしたら宜からうといふやうな、妙な理窟を言つて居られる人もありますけれども、それは人を誤るものであつて、それは僕々さういふ事が書いてあるかも知れぬけれども、決してそれがお釋迦様の御本心ではない。どうしてもこれは正しい事の目的の爲に、場合に依つては個人の利慾が必要であるといふことを仰しやるのである。それでは正しい目的の爲といふのは一體どういふことであるか、そこに自から階段があるのでないかと思ひます。人の困つて居るのを助けることも正しい、それなら支那人が困つて居れば、日本人を打ちやかして置いて支那人を助けてやつたら宜からう、露西亞人が困つて居ると言へば、その一番困つて居る者を救つてやるのが正しいと言ふけれども、それはさうではない、やはりそれは一つの目的を完成する爲にしなければならない。

結論

そこで私は日蓮上人が、佛教の中で兎角に忘れ勝な國家といふ問題をはつきり仰しやつたことが、實に有難いことはないかと思ふ。日蓮上人の教は、一口で言へば正しい目的の爲に自分が活動することである。然らば正しい目的とは何かと言へば、先づ國をしつかり立てる事であると言はれて居ります。併しその國を立てる事だけが最終の目的ではないだらうと思ひます。國を立てるといふことは、更に大きな人類全體を建設するといふ目的の爲の日本の國である、日本の國だけが宜ければ、支那も露西亞も皆亡びてしまつて宜いといふものではないと思ひます。併しそこに階段がある。社會主義は個人主義から一躍して社會主義に入つた、小學校から國家に聚り、國家から更に大きな人類に行くべきざるところの飛躍をした、これが社會主義の失敗ではなかつたか。小學校から中學校に行き、高等學校に入つて、大學に行く、斯ういふ順序があるやうに、個人から家庭になり、家庭から國家に聚り、國家から更に大きな人類に行くべきものであります。それがいきなり小學校から大學へ入つたものだから、こつちやになつてしまつて非常な混亂が起きたのではないか。『目的は大學へ行くのだからそんな中途の學校へ入つて居ることはないではないか』斯う言つたのではなくく佛法を立つべしと言はれたことは、この經濟問題といふことを味ひ、殊に日本が今個人の經濟活動から國家の經濟活動に飛躍しようといふ一番肝腎な時代に於ては、非常に大きな指導精神になるのではあるまいかと思ふのであります。(完)

國民精神指導としての佛教

穢 部 滅 事

事變が長期となり、各國との關係が彌々微妙に動いて来る時、國民としては億兆一心たるべき精神統一こそ要中の要であるが、而かも一番面倒な問題丈けに、ウツカリ手は着けられないであらう。多くの人々は、日本は神國だから神道で行けばよいと力んで最負の引倒しのやうな恰好であるが、多數必ずしも是なりといふ譯ではない。尊嚴な國柄丈けに昔からの歴史を辿り、それ丈け立派な教を以て指導すべきが當然で、世界の日本とせず、日本の世界といふ大きな思想を持つた國家愛でありたい。

一部の人于ては、宗教を排除したり、佛教の如きは外來教だとか、悲觀消極的で殊に神と佛とは衝突のある様に

彈壓する傾向もあるが、夫等の人には限つて佛典を精讀して理智の上から立論するのではなく、感情的に毛嫌するといふ淺識である、虚妄の分別と佛陀は仰せられてゐる。

最近賣出してる『生長の家』谷口氏の如きも、その言ふ所、東西古聖の現代的折衷論であるから、相當矛盾と危險思想が含まれて日蓮聖人のやうな知法思國の淨念は認められない。けれど、それに魅了せらるゝ者が若干ある程、現代知識階級は眞味なんである偏狹なんである、否皆立派な頭腦の持主なんだけれども、最初に受け入れた變形教育の充實されてゐる丈けに、それ以上佛教のやうな深淵な妙理は溢れて入り難いのである。

○ ○
大聖釋尊は私共の日常生活を御覽になつて次のやうに宣せられた。

諸の衆生を見るに、生・老・病・死・憂悲苦惱に燒煮せられ、亦五欲財利を以ての故に種種の苦を受く。又貪著し追求するを以ての故に、現には衆苦を受け、後には地獄・畜生・餓鬼の苦を受く。若し天上に生れ及び人間に在つては貧窮困苦・愛別離苦・怨憎會苦、是の如き等の種種の諸苦あり。衆生其の中に没在して歡喜し遊戯して、覺えず知らず驚かす怖ちず、亦厭ふことを生さず、解脱を求めず。此の三界の火宅に於て東西に馳走して、大苦に遭ふと雖も以て患とせず。舍利弗よ、佛は此を見已つて便ち是の念を作さく、我はこれ衆生の父なり。其の苦難を抜き無量無邊の佛智慧の樂を與へ、其をして遊戲せしむべし。

○ ○ 現代人にこの生老病死憂悲苦惱などと言つても痛切に感

人は何の爲めに生れて來たか、何うすればよいのか、お金で結論なのか、子供を深山産んだから國民としての誇りがあると思ふのか、……天業の民と謂はれるからは、モツ根本的のものを解決して貰ひたいと思ふ。相待的の物事は對手次第で左右されねばならず、從つて至誠一貫の貴い實現も望まれないことになるから、相待と共に絶待判を確立しておくことが大事なんである。古聖が、

人の壽命は無常なり、出る氣は入る氣を待つ事なし、風の前の蠶壳譬にあらず、賢きもはかなきも、老たるも若きも定め無き習なり、されば先づ臨終の事を習ふて後に佗事を習ふべし。

と教へられた意義は深い。世界とはこの地球上のことだけであり、地獄界とか餓鬼界といふものは自分等の心の上の問題だと觀念論的に片付けてゐる人でも、さて自分の最も親しい人の死別に遇つた時、恐らくその冥福を祈るの情操がムク／＼擦頭するであらう、其處に永久不滅のものを認

夫等の人のいふ心は懃れにも本心ではない、良心ではない、所謂佛教でいふ識であり、虚妄の分別なんである。釋尊はこれを顛倒の衆生と言はれた、又は毒を服んだ狂へる子供とも言はれて、そこに教ひの御手は下るのである。『智に依つて識に依らざれ』といふ一句を思ふ。私共の根本的生存欲の無知をして光明を點せしめ、佛の覺られた智慧を授けてやうとして尊い慈壽は垂れらるゝのである。

往昔、妙莊嚴王は、佛陀の御教に接して云く、世尊よ、

未曾有なり。如來の（眞淨の大法は不可思議微妙の功

徳を具足し成就したまへり。教戒（を守れば）所行安穩

（の生活を得）快く善（事をなす）なり。我今日より復た自らの心行に隨はじ、邪見・憤慢・瞋恚・諸惡の心を生ぜじ。

○ ○

本質的理論上には尊高な佛子だ、神だとは謂はれやうが、現實には無知低劣な、罪業の深い、怒りっぽい、強慾な沟に淺間しい虎狼に等しい者なんである。この點をしつかり反省せねばなるまい、其時こそ雖然として懺悔と共に佛慧を求むべく、一心清淨に妙法蓮華經の五字七字を信念口唱するに到るであらう、それは自ら常樂我淨の一路へと進展して居る姿なんである。やがて外に發しては理想文化の建設へと實現して行く。寔に佛陀の御教は、眞人の道を根本的に示教利喜されたものであるから、單に個人の安心立台だけではなく、人類の理想文化の最大要素をなすものであり、從つて興國日本の至寶といふべきである。

○ ○

教國は滅亡したではないか、印度を見よ、支那を見よ、朝鮮はどうぢやといふやうな人も相當あるが、此等は無眼の者で、真相を辨へてない戯論である。

『我語は深くして度世の要道を説く』と、釋尊は仰せられた、又『俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に一致せる歸結となる』（取意）は、法華經の名句である。

佛教の如き徹底せる明教を輕視したり、誹謗する者は洵に人類の大敵である、法華經には『其の人命終れば、阿鼻獄に入らん』とある。眞に我國を愛するならば、此の大道を護るべきである。眞に世界の平和向上を欲するならば、佛陀を仰ぐべきである。眞に自己を知らんと志すならば、且らく一切を擲つて只今より至心以て大聖の妙判に浴すべきが先決の大事と思ふ。

○ ○

佛教を正當に信奉して衰微した個人も、國家もない、皆悉く法悅の境地にあつた事は史上に明かである。然るに佛

記事

本部團報

九月一日 關東大震災の第十七周忌に相當するばかりでなく、今月から一日は興亞奉公日と定められ、早起勵行、報恩感謝、大和協力、時間嚴守、節約貯蓄、心身鍛錬、禁酒禁煙等々の項目を擧げて實行するやうとの事である。勿論此等の事は今更御注意なくとも、宗教信仰に覺めてゐる者は當然行つてゐる筈であるが、特にこの大きな記念日に際して、當時の追憶と共に震災の各位に至誠御回向すべく本部に於て午前六時、法要を厳修し、國民精神作興の詔書拜讀終つて、礎部當任理事よりその恐るべき大災害は、單に天災地變とばかりに押し片付けることなく、加ふるに人心の弛緩に大なる反省を促がす必要ありとし、今や事變はこの國民の精神上に於ける大震災であることを指摘し、これが善處には最も精神的指導を必要とする事を強調し、佛教の特に法華經の人生觀を屢述して聽衆の内觀を深め、國民の精神統制の急務であることを主張し、多大の感銘を與へた。

次に池田監事より震災當時の九死一生の體験談に始まり

當日は本團員一部と酒悦及び東運立正青年團に依つて講堂滿員盛況であつた。震災當時を記念すべく、供養の軍用パンや煎餅を手にして嬉嬉として散會せるは八時少し過であつた。

龍口法難會 日蓮聖人御一代中の大轉換期となつたこの意義深い御法難會を、九月十日の日曜日午後二時、講堂を嚴淨して一同法味を捧げた。恰度九月十日は日蓮聖人第二國諫の聖日である。法華經を誹謗する場合には必ず三災七難が並び起る、而かも七難中の他國侵逼の難こそ最も恐るべきであるが、第一國諫の後、九ヶ年を経て事實は豫言通りに顯現し、蒙古の來牒は年毎に頻繁となつて來た。國の上下は彌々神經過敏となる時、獨り大聖人は泰然として、蒙古は西に動き、蝦夷は東に叛く、内憂外患交到る國難切なるに臨んで、此の大難を打開して我國を安泰ならしむる者は、日蓮に非らざれば叶ふ可らずとの強烈な大自信の下に、弟子檀那を嚴戒して此の神洲の威風を示現されんとした。

立正青年團報

た。俗間の傳説による『敷島の大和心を人間は蒙古の使斬りし時宗』といふ如き豪勇は、我が肇國精神を知らざるものゝ俗歌である。當時大聖人は、若し幕府が日蓮を用ゆるならば、蒙古の使は切らせなかつたものと懸れまた、そのお心持ちこそ所謂我國を思ひ、法を知る聖者と自ら頭は下がるのである。そこで法華經を信奉する者は當然我國體の尊嚴を挙へねばならぬ、幸にも岩野少將は古神道の研鑽を積ませて居り、殊に古事記の解釋に於て獨特の着想を持つて居られるので、法要後三時より五時過まで二時間以上に亘つて『聖國の神話』と題してその肇國準備の綱要を接述され、若い人達に多大の感銘を與へられた。後半は次回にお願ひすることにして五時半閉會とし、急がれない人々は會議室に少憩、懇談時餘を有意義に過したことは洵に歎ばしい事であつた。

御書講座 小林一郎先生の撰時鈔講義は、九月五日より續けられ、毎火曜日晚に開筵されて居るから、奮つて御來聽をお薦めする。

次で奥の院に於ける富木常忍氏の墓に詣で、隊伍を國府臺陸軍病院に進めた。そこには同友江森君戰傷の身を慰問せんが爲めである、幸に八九分通り恢復されて居た同君を囲んで、その戰功を讃しつ、負傷された當時の心境等を聽き、他の戰友の辛勞を偲びつ、一同は深い感激に浸つたのであつた。此の時礎部先生は起つて感謝と併に『法國冥合』のお話をされ、續いて池田團長は其の功勞を稱へ吾等の進むべき途を敷演された。場所柄周圍には多數の病傷兵

や慰問者もあつて、大衆は時ならぬ精神上の御馳走を演喫したことは自他の最も數びとする處であつた。

時間の制限もある事とて、適當に見計つて一同は快適の一日も速かならんことを祈りつ、隊伍整然其門を辭し、進軍歌勇ましく河岸を過つて、程なく京成電車のお蔭で無事上野に歸着したのは正に三時半であつた。

愉快な一日を過ごし、この氣分で一月を樂しく精進するであらうと、心も躍りつゝベンを馳せた。

福島支部報

九月七日 校長先生、吉松先生、支部の方方の御出席を戴き、磯部先生をお迎へし休暇後第一回の例會を開く。皆日に焼けた元氣な顔で出席した事は嬉しかつた、然し幹事橋本君、委員鈴木君の顔が見えなかつた事は非常に残念に思はれた、兩君の一日も早く全快されん事を祈つて居ります。一同は勤行後、磯部先生より『法を知り、國を思へ』と題した法話あり。

我々が日本國體を觀る場合、之を科學的に觀たのではその尊さはわからないであらう、之を宗教的情操に依て觀た場合、眞に國家の尊さがわかるのである。即ち法華經の事

實化した此の理想國家こそ、八萬の國にも超えた有難い國家である。同時に我々の責務は彌々重大である、と愛國護法のお話を與へられた。

九月七日夜 中村様宅、一同は勤行の後、岩井支部長より世界情勢益急、我國は支那事變處理に一意努力すべき秋五人の信心倍増を望むと希望あり。磯部先生より『釋尊と日蓮聖人』と題して、龍口御法難から説き出され、本化地涌菩薩の再来より進んで、如來壽量品の本佛釋尊の光顯に及んで時餘、一同法悦に満ち、十時散會。



團費誌料寄附金及維持費領收 (自八月二十一日)

一金壹圓貳拾錢也	東京	本郷常次郎殿	一金貳圓貳拾錢也	兵庫縣
一金貳圓五拾錢也	同	須藤仙吉殿	一金壹圓貳拾錢也	山梨縣
一金貳圓五拾錢也	横濱	吉村賴治殿	一金貳圓貳拾錢也	千葉縣
一金貳圓貳拾錢也	群馬縣	増田清三郎殿	一金五	宮城縣
一金五	圓也	蓮福寺殿	一金五	東京
一金壹	圓也	石井幸生殿	一金五	同
一金貳拾圓也	東京	江藤徵殿	一金五	千葉縣
一金參	圓也	村田竹次郎殿	一金貳圓貳拾錢也	平山
一金貳圓貳拾錢也	同	宇野博順殿	一金五	三藏殿
一金五	圓也	小林茂雄殿	一金貳圓貳拾錢也	高木左一殿
一金拾	圓也	森井道安殿	一金貳圓貳拾錢也	木間寧夫殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	尾形信一殿	一金貳圓貳拾錢也	長谷川義一殿
一金五	圓也	花水菊太郎殿	一金參拾圓也	石鶴敏造殿
一金參	圓也		一金參拾圓也	乾山殿
			一金參拾圓也	柴田武治殿
			一金參拾圓也	治殿

右御清援難有入帳仕候也

(領收證は別途差上ませんが御諒承願ます)

御會式豫告

左記の通り日蓮聖人非滅現滅會相營み聊か報恩謝德に擬し度く存じます。

法要後 肇國神話 天孫降臨の條より進んで其の理想と皇道を岩野直英閣下
に依つて講説さるる筈てすから奮つて御來會の程お待ち申上ます。

日時 十月八日(日曜)午後二時開筵

場所 統一會館講堂

以上

昭和十四年十月一日

財人團統一團

○御注意、別途御案内は發信致しませんから、御誘合せて御參詣下さい。

御來會の方へ小冊子贈呈。

莊嚴菩提心經一卷

第八套の二

姚秦三藏鳩摩羅什譯

是の如く我れ聞きき、一時、佛、王舍城耆闍崛山中に住したまひき。

爾の時會中に菩薩有り思無量義と名づく。佛、思無量義菩薩に告げたまはく、菩薩菩提心
を修する者、衆生に非らず。菩提心とは不可得なり、此の心は非色非見なり、法も亦た得
者有ること無し。何を以ての故に、衆生は空なるが故なり。思無量義菩薩、佛に白して言
さく、世尊の法相是の如く甚深なり、菩薩は當に云何んが修行すべき。佛、思無量義菩薩
に告げたまはく、善男子菩提心とは非有非造なり、文字を離る、菩提は即ち是れ心なり、
心は即ち是れ衆生なり、若し能く是の如く解せば、是れ菩薩菩提心を修すと名づく。
佛、告げたまはく、善男子諦かに聽け、諦かに聞き善く是を思念せよ、應に説くべき所は吾れ
今當に説くべし。菩薩菩提心を發すに十法有り、何等をか十と爲す。發第一心は、衆善
の本を成就す、譬へば須彌山の若く衆寶を以て莊嚴す。發第二心は、檀波羅蜜を行ず、譬

へば大地の若く、衆善の法を長養す。發第三心は戸波羅蜜を行ず、喻へば師子王の能く衆獸を降伏するが若く、邪見を滅除するが故に。發第四心は摩提波羅蜜を行ず、喻へば那羅延の若く、堅固にして壞す可らず、煩惱を滅除するが故に。發第五心は毗梨耶波羅蜜を行ず、衆善の法を現行す、喻へば天華の若く、如意說法するが故に。發第六心は禪波羅蜜を行ず、喻へば日光の明かるが若く、衆聞を滅除するが故に。發第七心は般若波羅蜜を行じ諸願の満足を得、喻へば商賈客の衆難を離れ得る若きが故に。發第八心は方便波羅蜜を行じ諸の障礙を滅除す、喻へば月の盛滿にして清淨無穢なる若きが故に。發第九心は本願を滿足せんと欲し淨佛國土に遊び、深妙の法を樂聽して貧窮を滅除するが故に。發第十心は、喻へば虛空の若く其智は窮盡無し、譬へば轉輪王の如く一切種智を成就するが故なり。善男子、是の如く能く十種の心を發すを名けて菩薩と爲す。

復た次に善男子、云何が名けて波羅蜜義と爲す。行勝進の満足是れ波羅蜜義なり、第一智を成就する是れ波羅蜜義なり、無盡の法藏廣く能く示現す、是れ波羅蜜義なり、一切衆生界を解す是れ波羅蜜義なり、不退轉を成す是れ波羅蜜義なり、諸の異見を破す、是れ波羅蜜義なり。是の如く善男子、波羅蜜義は甚深無量なり我れ但だ汝が爲めに略して之を説く

のみ。

若し善男子善女人有つて德本を宿植せば、乃し能く是の經を聞くことを得ん、是れ少功德の人の聽聞する所に非らず、若し暫くも此の經を聞き、讀誦し書寫すこと有らん、此の人は是の身を捨て已つて常に諸佛を見たてまつり、諸佛を見已つて能く諸佛に於て妙法輪を轉じ、即ち無盡陀羅尼印を得ん。

觀世音菩薩授記經

第十一卷の四

宋黃龍國沙門曇無竭譯

是の如く我れ聞きき、一時、佛、波羅奈仙人鹿苑中に在ましき。

佛、華德藏に告げたまく、西方此を過ぐること億百千刹にして世界有り、安樂と名づく。其の國に佛有り、阿彌陀如來・應供・正徧知と號す、今現在說法せり。彼に菩薩有り一を觀世音と名づけ、二を得大勢と名づく。是の三昧を得たり。

又願つて彼の安樂世界の阿彌陀佛を見る。此の善男子、善女人をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ、彼の國に生ぜんと願す、彼の國に生じ已つて絶て阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。

彼の國の衆生、菩薩、聲聞は、悉く此の土及び釋迦文の諸の大衆に圍繞せられ說法したまふを見ること猶ほ掌中に阿摩勒果を觀するが如し。皆愛樂歡喜の心を生じ、是の如きの言を唱ふ、南無釋迦如來と。

爾の時に觀世音及び得大勢菩薩摩訶薩、彼の佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊よ、釋迦如來、希有の事を現じたまふ、何を以ての故に、彼の釋迦牟尼如來・應供・正徧知は少うして名號を現じ、無想大地をして六種に震動せしめたまふ。爾の時に阿彌陀佛、彼の菩薩に告げたまはく、釋迦牟尼は但だ此の土に其の名號を現するのみならず、其の餘の無量の諸佛の世界にも悉く名號を現じ、大光普く照し六種に震動すること亦復た是の如し。彼の諸の世界、無量阿僧祇の衆生あつて 釋迦牟尼の名號を稱譽するを聞かば善根を成就し、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得ん。時に彼の衆中の四十億の菩薩は、釋迦牟尼如來・應供・等正覺の名號を聞いて同聲に發願善根もて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。佛即ち授記して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。

爾の時に觀世音及び得大勢菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊よ、我等は娑婆世界に詣りて釋迦牟尼佛を禮拜し、供養して其の說法を聽きたてまつらんと欲す。佛の言はく善男子、知るべし是れ時なり。時に二菩薩、即ち相謂つて言く、我等今日定んで彼の佛の所說の妙法を聞かん。時に二菩薩、佛の教を受け已つて彼の四十億菩薩の眷屬に告ぐ、善男

子よ、當に共に娑婆世界に往詣して、釋迦牟尼佛を禮拜し、供養して正法を聽受すべし。何を以ての故に、釋迦牟尼如來・應供・等正覺は能く難事を爲し、淨妙の國を捨てて本願力を以つて大悲心を興し、薄德少福にして貪恚痴を増す濁惡世中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成じて說法爲したまふと、是の語を説く時、菩薩、聲聞、同聲に數じて言く、彼の土の衆生は、釋迦牟尼如來・應供・正徳知の名號を聞くことを得て快く善利を得たり、何に況んや見ることを得て歡喜の心を發さんをや。世尊よ、我等は當に共に彼の世界に詣でて釋迦牟尼佛を禮拜し、供養すべしと。佛の言はく、善男子、知るべし是れ時なり。

爾の時に觀世音及び得大勢菩薩摩訶薩、其の眷屬八十億衆の諸菩薩と俱に寶臺を莊嚴し悉く皆同等なり。譬へば力士の臂を屈申する頃の如く、彼の國より沒して此の世界に至る。時に彼の菩薩、神通力を以つて此の世界をして地の平かなること水の如くにならしめ、八十億菩薩前後を圍繞し大功德を以て莊嚴を成就し、端嚴にして殊特なること喻を爲す可きこと無し、光明徧く娑婆世界を照す。是の諸の菩薩、釋迦牟尼佛所に詣で、頭面に足を禮し右繞七匝し却つて一面に住し、佛に白して言さく、世尊よ、阿彌陀佛は世尊を問訊し

たまはく、少病少惱にして起居輕利に、安樂に行じたまふや、否や、又彼の土に現じて妙事を莊嚴したまふや。時に此の菩薩及び聲聞衆、此の寶臺衆の妙莊嚴を見て未曾有なりと歎す。

佛の言はく、乃往過去廣遠無量不可思議阿僧祇劫、我爾の時に於て百千王と爲る。時に初めの大王、劫盡きんと欲する時、世界有り、無量德聚安樂示現と名づく、其の國に佛有り、金光師子遊戲如來・應供・正徳知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號す、是の佛刹土、所有の清淨嚴飾の事を今汝が爲めに説かん、意に於て云何ん。安樂世界の阿彌陀佛國土所有の嚴淨の事、寧ろ多しと爲すや、否や。答へて曰く甚だ多し、不可思議にして具に説く可きこと難し。佛、華德藏に告げたまはく、假使ひ人有つて一毛を分拆し以つて百毛と爲し、一分毛を以つて大海水を滯せん、意に於て云何ん、一毛端の水と、大海の水に於て何をか多しと爲んや。答へて曰く、海水甚だ多し譬を爲す可らず。是の如し華德藏よ、應に是の知を作すべし、阿彌陀國莊嚴の事、毛端水の如く、金光師子遊戲佛國は大海水の如し、聲聞、菩薩の差降も亦た爾なり。彼の金光師子遊戲如來

亦た衆生の爲めに三乘の法を説く、我れ恒沙等の劫に於て、此の佛國の功德莊嚴せる菩薩、聲聞の快樂の事を説かんも猶ほ盡すこと能はず。

佛の言はく、善男子よ、阿彌陀佛の壽命無量百千億劫にして當に終極有るべし。善男子よ、當來廣遠不可計劫にして阿彌陀佛は當に般涅槃すべし、般涅槃の後、正法世に住すること佛の壽命と等しく、在世滅後に所度の衆生悉く皆同等なり。佛涅槃の後、或は衆生の佛を見ざる者有り、諸の菩薩有りて念佛三昧を得て、常に阿彌陀佛を見ん。復た次に善男子よ、彼の佛の滅後に一切の寶物、浴池蓮華衆寶の行樹、常に法音を演べ佛と異なること無し。善男子よ、阿彌陀佛正法滅して後、中夜分を過ぎて、明相出づる時、觀世音菩薩、七寶菩提樹下に於て、結跏趺坐し等正覺を成じ、普光功德山王如來と號す。

觀世音菩薩授記經 毕

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	持料價
法華經要義	題天寶	持料共
日蓮主義心髓		全
日蓮主義精要		全
真理の基礎に據つ佛教の信仰		全
法華經要品		全
日生上人レコード(四面)		全
本尊意識に就て		全
釋尊の八相成道		全
法華經の心髓		全

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
金	壹	圓	七	拾	錢				
金	壹	圓	八	拾	錢				
金	貳	圓	五	拾	錢				
金	壹	圓	五	拾	錢				
金	貳	圓	九	拾	錢				
金	貳	圓	十	拾	錢				
金	五	拾	五	拾	錢				
金	貳	圓	廿	五	錢				
金	貳	圓	五	拾	錢				

七十ノ六町羽音區川石小市京東
部版出團一統 法人圓
番〇二四九京東替振

本多日生上人

勸行作法

佛教の心髓

穀部滿事謹製

河合勝明著
皇道と日蓮主義

送定
料共價

金 壱 圓

本多日生上人

勸行作法

佛教の心髓

穀部滿事謹製

河合勝明著
皇道と日蓮主義

送定
料共價

金 壱 圓

本多日生上人

勸行作法

佛教の心髓

穀部滿事謹製

河合勝明著
皇道と日蓮主義

送定
料共價

金 壍 圓

不許複製	注意	價定一統
	▲前金申込ハ總テ前金ノ事 御候居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御 通知ノ事	一冊 金貳拾錢 送料壹錢
	▲御申込ハ總テ前金ノ事 御候居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御 通知ノ事	半ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共
	昭和十四年九月二十七日印刷納本 昭和十四年十月一日發行 (第五百三十五號)	一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共
	東京市小石川區音羽町六ノ十七 發行人 磯 部 滿 事 東京市四谷區内藤町一 印刷人 山 田 英 二 東京市小石川區音羽町八ノ十一 印刷所 野島好文堂印刷所 電話牛込六九六六番	東京市小石川區音羽町六ノ十七 發行人 磯 部 滿 事 東京市四谷區内藤町一 印刷人 山 田 英 二 東京市小石川區音羽町八ノ十一 印刷所 野島好文堂印刷所 電話牛込六九六六番

發行所 財團 統一團
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
攝書東京九四二〇番

次 目

- 佛教の根本と其の應用(其十五).....本
開目鈔講話(第卅一講).....小
肇國神話(一).....岩
軍人と日蓮主義.....岩
通力と正信解.....磯
記事

多林野潤部
一日満經直
郎生英夫事

○本部團報 ○萩支部報 ○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收

